

きのご雲 第4集 被爆50年記念号 平成7年(1995年)発行

< 目次 >

- あの日工場内にて・・・西 幸児さん 当時中学2年生(14歳)・・・P5
爆心地より1.2km
- 忘れられない光景・・・白沢 英寿さん 広島 当時27歳・・・P6
兵団司令部で任務中
- ピカドンと呼ばれて・・・小笠原 八重子さん 広島 当時2歳・・・P7
- 48年目、初めて語る体験・・・小田 一彦さん 広島・・・P8～10
広島商船高等専門学校で授業中被爆
- 一瞬の差で・・・雨宮 美恵子さん 広島 当時3歳・・・P11
爆心地から1.2km
- 入市被爆者として・・・渡辺 重雄さん 広島・・・P12
救護活動のため、翌日に広島市に入った
- 薬のなかったあの時・・・白沢 いづみさん 広島 当時21歳・・・P13
- 焼け残った我が家で・・・匿名 長崎・・・P14
- 忘れられない光り・・・木下 勝雄さん 広島・・・P15
- 特殊爆弾と聞かされて・・・小林 隆一さん 広島・・・P16
救護活動のため、翌日に広島市に入った
- 長崎で被爆して・・・中川 和子さん 長崎・・・P17
- 直爆をのがれて・・・石丸 照さん 長崎 当時24歳・・・P18
- 思い出したくないあの日・・・匿名(女性) 広島・・・P19
- 日時も解らぬ看護・・・匿名(男性) 長崎・・・P20
衛生兵として大村海軍病院に配属中被爆
- 水槽の水を求めて・・・坂本 虎雄さん 広島 当時25歳・・・P21
司令部で任務中
- ケロイドを残して・・・内藤 昭治さん 広島 当時17歳・・・P22
暁部隊で幹部候補生として任務中
- あの時の・・・雨宮 広之さん 広島・・・P23

原爆はいらない	匿名(男性)	広島	P24
暁部隊で通信教育兵として任務中			
何も知らなかった私	匿名(男性)	長崎 当時1歳	P25
幼児期に被爆した私	遠山 睦子さん	広島 当時3歳	P26~27
爆心地から4km			
妹を探した日々	中村 百合子さん	広島 当時19歳	P28
水、水の声が	杉原 武子さん	広島	P29
大家の娘さんの健在を祈る	勝村 田尾さん	広島	P30
奇跡的に生きて	深沢 政治さん	広島 当時28歳	P31~32
兵隊として任務中			
今、訴えたいこと	小田切 恒広さん		P33~34
原爆病を克服して今	匿名	長崎	P35~36
爆心地から1.5km以内のところで被爆			
核兵器の廃絶を	匿名(女性)		P37
朝食中に			
粥米50年を生きて	宮沢 誉福さん		P38
子供の為に平和を	坂口 忠男さん	長崎	P39
長崎に住む祖父母の安否を気遣い7日目に入市			
直爆をまぬがれて	鈴木 力蔵さん		P40
救護活動のために4日後に広島に入った			
怖い原爆と癌	藤野 道子さん	長崎 当時9歳	P41
広島のと街と地獄	込山政清さん	広島	P42
宇品派遣部隊で任務 爆心地から約4km			
治りにくい風邪	大越 シミ工さん	長崎 当時24歳	P43~44
海軍監督官事務所に勤務			
いつか、かならず	吉本 富貴恵さん	広島 当時17歳	P45
核兵器の廃絶を	杉田鉄之助さん	広島	P46
命令を待ちつつ	匿名	広島	P47
呉海兵団			
直撃をまぬがれて	矢島和雄さん	広島	P48

広島市江波の朝	匿名	広島	P49~50
不安な日々	清水幸平さん	広島	P51
火葬場となった運動場	藤野義男さん	長崎 当時 11 歳	P52
長崎市出身 爆心地から 3~4 k			
思い出したくない	匿名	広島	P53
多くの被爆者を看て	渡辺智さん	広島 当時 23 歳	P54
船舶通信隊			
二世にも手帳を	周防ヨシ子さん	長崎 当時 18 歳	P55
目の前で倒れた子供達	桑原淳さん	長崎 当時 16 歳	P56
海軍少年兵			
子孫が心配	匿名	広島	P57
兵隊として任務中			
これからが「私」のたたかい	広沢猛さん	広島	P58
暁部隊			
幼児の体験、背負う苦痛	佐野真穂子さん	長崎 当時生後 2 か月	P59
国連で核兵器廃絶の先頭に	深沢芳造さん	広島 当時 25 歳	P60
兵隊として任務中			
小学生よ安らかに	匿名	広島	P61
父母たちに感謝	匿名	長崎	P62
水を呑んで死んだ人	新藤英一さん		P63
三年の命と云われ	一瀬保さん	広島 当時 18 歳	P64
運よく生きて	匿名	広島	P65
鉄道隊員として任務			
一人で悩んだ 30 年	匿名	広島	P66
母のお陰で今日	中沢フジエさん	広島 当時 21 歳	p67
勤務先の銀行に向かう途中			
核兵器の廃絶を	中田武男さん	広島	p68
国家補償の援護法を	相吉英一さん	広島	p69
戦争のないことを願って	渡辺幸永さん	広島 当時 19 歳	P70
船舶隊			

難病とのたたかい	山本トヨ子さん	長崎	当時 9 歳	P71~72
死体の山	柴山栄一さん	広島		P73
兵隊として任務中				
被爆 50 年	高橋健さん	広島	当時 19 歳	P74~75
爆心地から約 2 km				
山のような死体	内藤嘉彦さん	広島		P76
兵隊として任務中				
火傷もなく	杉原健さん	広島		P77
死者にはなむけを	清水要四郎さん	広島		P78
兵隊として任務中				
無 題	高橋ゆきさん			P79
もし私の娘であったら	杉山国夫さん	広島	当時 19 歳	P80
兵隊として任務中				
運命の朝	吉野静湖さん	広島	主婦	P81~82
被爆者の手で原爆展を米国で	池崎伸一郎さん	長崎		P83
被爆のありのまま	越賀大流さん	広島		P84~85
第 2 軍総司令部情報通信班				
死の座をうばわれて	米内幸子さん	広島	当時 27 歳	P86~87
世界中仲良く	村松寿さん	広島		P88
振り返る 50 年	内藤藤三さん	広島	当時 22 歳	P89~90
暁部隊 爆心地から約 2 km				

あの日工場内にて

西 幸児さん

当時中学 2 年生 爆心地より 1.2 km で被爆

私は当時、市内中心部の中学 2 年生でした。奇しくも市内の同学年では、私達の学校が学徒動員第一号となり、爆心地より 1.2 キロメートルの工場に 8 月 1 日より出勤しました。他の中学校の 1, 2 年生と私の学校の 1 年生全員は、爆心地近くで家屋疎開作業に従事し、全員死亡しました。ここにあらためてご冥福をお祈り致します。

原子爆弾のことをピカドンと言いますが、ピカは光線でドンは爆風を意味します。私達は学年の身分で、工場の鉄骨に大きなガラスが嵌められた講堂の中で、丁度、朝礼開始の時間とピカの時間が同時時間となり、光熱戦を感じると同時に机の下に退避して、続くドンではガラスの小破片で全員傷つく程度でしたが、屋外では火傷、木造、レンガ造りでは倒れ、崩れ、多数の方々が傷つき、亡くなりました。机の下でどれだけ時間が経っていたか、目を開けると周囲が真っ暗で何も見えませんでした。先程までの夏の明かりはどこにいったのかと自分の目を疑いました。これは放射能を帯びたごみの固まりでした。薄明かりを求めて、手探りで外にでて、川の土手に上がって見ると、市内の家屋が全部倒れ、所々小さな火の手が上がっており、それからどれだけの時間でしたか、土手下の倒れた家の下敷きになって助けを求める方の声を聞きながら、何の手立てもできないうちに瞬く間に火の手に追われ、唯一の退路の木造の橋が火に包まれ、川を泳いで渡り鉄道線路を歩いて疎開先の家に帰りました。家の隣の小学校が臨時の負傷者収容所となり、当日より多くの方々が集まりましたが、その光景を見て私は一瞬に絶句しました。ほどんどの方が顔、腹、背、手、足と酷い火傷で皮膚はぐしゃぐしゃになり、中にはベロンと剥がれている。医者がいても消毒するくらいで何もできない。まるでこの世の生き地獄としか見えませんでした。それから数日の間に火傷の後が何かがちょっと触れると、またベロンと剥がれて、そこにハエが卵を生み、体の中からうじむしがわいてくる。それを竹の箸でつついて摘み出す。ほんとうに痛かったです。また原爆を憎んだでしょう。そのうち、重症の方達は脱水状態になり一日中、水、水と水を求めながら亡くなっていきました。8 月 10 日から 15 日の 6 日間工場に救護活動に行きましたが、途中の川には多くの方々が水を求めたのか、熱さから逃れたのか、風船のように膨らんで流れていました。

忘れられない光景

白沢 英樹さん

広島の兵団司令部で任務中

昭和13年入営、北満州在営。昭和18年予科士官学校助教（朝霞）拝命、終戦時広島兵団司令部での勤務のため、被爆まで戦地活動皆無のため、突然の被爆（ピカドン）に光、爆風、強烈肌を射す。熱気が同時に襲来、砂塵もうもうの中に吹き飛ばされた恐ろしさは、たどえりもない戦慄であった。

司令部の家は倒れ、火災は発生する。市の中心地には、冲天高く巨大なキノコ雲がのびあがり、その先端が不気味な紫褐色をしていたように見えた。

副官が行方不明で捜索に外に出ると、市中火煙もうもうとして市街地は見る影もない。真っ黒の顔、全裸に近い人が黒い皮膚をたらしめて歩いてくるのを見て驚いた。どうやら残っていた日赤病院や日陰を求めて、一時生きのびた焼けただれた人達の様相は、見るに耐えなかった、目や口唇はふくれあがり、只うめくだけ。兵隊さん水をくれ、と言われる人はまだよくて、只あえいでいる人達がほとんどだった。

その様な方達を兵団に収容するトラックが幾台も来たが、荷台から降ろすに手を添える所もなかった。その夜、ガレージに運ばれたが、うめき声が耳について眠れなかった。その方達は引き取られる者はわずかで、命絶えて昼となく夜となく海岸で荼毘にふされた。

被爆後山梨に帰ってから全身に吹き出物ができ、なかなか治らなくて心配したが、病氣知らずと云われる程に元気になった。最近では医者通いをするようになった。

核兵器の地球からの全廃を願い、被爆者に国家補償の援護を一日も早く制定してほしい。

ピカドンと呼ばれて

小笠原 八重子さん

当時2歳、広島で被爆

私は当時2才、戦争の記憶は殆どありませんが、ただぼんやりと脳裏に浮かんで来るのは母が両手を包帯でぐるぐる巻にして、実家である滋賀県に戻ってきたその時、近所の人達が腕の無い人が帰って来たよと噂になりました。

その頃、広島に住んで居りました私達は、原爆が投下された日の朝、母は2才の私を連れて買物に出掛けて、その出先で原爆にあいまして、一瞬の爆風に私をかばう為に覆いかぶさったつもりが、気がついて見たら手にしていた物は無く、かばったはずの私も居なくて、気が動転し探し回ったといいます。幸いにも少しの怪我だけで、山のふもとに転がっていたとの事です。

そしてその日の様子を今は亡き母から「さながら地獄図だった」と聞かされました。母は背中一面におおやけどを負い、その頃は薬も少なく思うような手当も出来ずに、一週間後に母の郷里である滋賀に帰って来た頃は夏でもあり、母の背中にはウジ虫がはびこって、それから3年間は生死の境をさまよいました。

あれから50年、この歳月を被爆に遭遇した人達はどのようにその人生をマイナスからプラス志向にと変えていった事でしょう。計り知れない苦難の道のりだったと思います。その人達の苦しみを無駄にしない為にもこれからの人生を大切に生きたいと思う今日この頃です。

小学生の頃の私のニックネームというか、からかい半分なのか「ピカドン」と云われていやな気持ちでした。その頃、新聞紙上に被爆者の死亡名がよく目につき、もしかしたらと不安を感じました。

未だにどこかの国で絶えず戦争が行われている。人間のおろかな野心と欲望の為に、尊い生命が失われている事は痛恨の思いに堪えません。

48年目、初めて語る体験

小田 一彦さん

広島商船高等専門学校で授業を受けている時に被爆

私は広島生まれ、広島で育った者です。あの日の事を話したり、書いたりする事はとても出来ませんでした。語り継がなくてはならないと決意するまでに48年の歳月を要しました。

8月6日の朝、広島高専の機械科の1年生で、山本博先生の講義が始まったばかりの8時15分、教室の左側窓の外でピカッと光り、まるで大容量の電気がショートでもしたかのような白い明光が走り、続いて赤い焰（熱線）が教室の半分位まで入り込み、直後に轟音と共に、木造2階建ての校舎が倒壊しました。

私は白い閃光を見た瞬間に机と机の間の通路に伏しました。そのため火傷を免れましたが、窓ガラスの破片が、顔、頭、腕に突き刺さりました。どの位たったか分かりませんが、目を開いたときは真っ暗でしたが、順次見えるようになり、這って右手の窓に進み、校庭に降りて見てびっくり、校門を出て見たその光景はこの世のものとは思われない情景で、道行く人はすべて血みどろで、全身火傷の人は皮をひきずって、皆、宇品の方向に列をなして歩いています。

その時市内は火の海となっていました。私も着ていたシャツを引き裂いて包帯代わりに傷口に巻きながら、皆の列に入って歩きました。途中、皆実町の共済病院を見つけ、皆手当を受けようとしたのですが、病院も大破しており、火傷の油性治療薬を取り出すのがやっとなので、私は何の手当もしてもらえませんでした。

全身火傷の人が生きようとして居られる姿を見ると胸が一杯になり、悲しさと怒りが重なるのを我慢して手当の手助けをしました。病院の庭先には何十人もの人が横たわり「水をくれ、水をくれ」と言いながら死んでいくのを見て、命尽きる最後の水をコップで飲ませてあげました。看護婦さんに叱られたけれど悪いことをしたとは思いませんでした。

そこで元気そうな男の人に自宅のある十日市町は大丈夫でしょうかと聞いたら、「十日市は大丈夫」と云ってくださったので、火の手の燃え盛る中心部に向かって、母や妹の無事を祈りながら、今来た道をもどりました。

途中見かける人は殆どが衣服が焼けちぎれ、身体の皮膚が全面一皮むけて何か布をぶら下げた様に見え、全く目をそむけたくなる様な痛ましさでした。途中累々たる焼死体と火煙をさけて回り道をしながら十日市町付近に着いたのは午後4時を過ぎていました。電車道から見る我が家は全焼中で、近寄ることは出来ません。

ただ母と妹の無事を祈るのみ、南蟹屋町の大破した学校寮に眠れぬ一夜を明かし、翌日から二人の消息捜しをはじめました。妹は爆心地から百数十メートルの場所で家屋疎開作業を行っていて、学年生徒全員焼死との事で死亡を知りました。

母は助産婦だったので郊外の立ち寄りそうな所を尋ね回りましたが安否はわかりません。8日頃より収容名簿が各所に貼り出され、見て回りましたが母の名前はありませんでした。でも私は、暑い広島を毎日歩いて捜し回り、駄目かなーとあきらめの心と、どうか助かってくれと念じる心で13日夕刻まで捜し回り、とうとう80キロも離れた叔父（母の兄）の所に行く決心をして歩きだしました。

途中2泊して、やっと山県群芸北町の叔父の家にたどり着きました。そこには6日の日から毎日毎日私の家族のうち誰か一人でも生きて帰って来て欲しいと念じながら、叔父、祖母をはじめ近所の方達が戸外で待っていて下さいました。今まで一度も泣かなかった私ですが、皆さんに「母も妹も駄目だった」と言ったきり涙が溢れ、祖母に抱き着いて大声で泣きました。その日は終戦の8月15日でした。

その後も焼きおにぎりを作って貰って、度々広島市に出て、母の生死の消息を確かめに奔走しましたが、判明しないまま、9月6日に遺骨もないまま葬儀を行っている時に、8月6日の消印のある葉書が配達され「小田トミヨを収容している。全身火傷であり至急出頭されたい」とあり、なんと丸一カ月かかって届いたのです。

すぐに弁当や薬を持って、叔父と二人で出発し、途中休息もせず歩きに歩き、翌日の昼過ぎ大野浦陸軍病院に着き、入り口受付で葉書を見せましたら、暫く書類に目を通して「この方は8月9日、全身火傷が原因で手当の甲斐なく亡くなりました。市外の親類の名を尋ねてハガキを出しました。二人の子供が広島市に居るので心配しておられました」と云われ、重体の母が死ぬ間際まで私達二人を心配してくれていたかと思うと無念で大泣きました。病院で骨の入った箱を頂き、お礼を云って帰路に着きました。二人の葬儀はあらためて行い埋葬しました。

二人はいつまでも広島に住み、その移り変わりを見たいに違いないと思い、墓石は広島におくつもりです。11月から呉市の借校舎で授業を始めると学校よりの通知に、早速準備を

して呉市に行き無事に卒業する事が出来ました。

両親や兄弟と仲良く生活している級友などを見ると、羨ましく、自分の不運を嘆き、学生時代も夜寝床で何度涙を流した事か、あの時、家族と共に死んだ方が良かったのではと思った事が何度もあります。でも現実には私は生きています。原爆の悲惨な体験をした事を多くの人々に語りつがなければならぬと考えました。

地球を人間の住む星として残したいと思うなら、皆さん原水爆の恐ろしさをよく考えてみて下さい。世界が再び核戦争を起こさないように祈ります。核兵器は子々孫々にダメージを与える極悪非道の兵器です。

日本政府は再び被爆者をつくらぬ為に、核戦争は絶対にしないことを約束させる「国家補償の被爆者援護法」を制定されるよう願って、生あるかぎり頑張ることを誓います。

一瞬の差で

雨宮 美恵子さん

当時3歳、広島で被爆、爆心地から1.2km

私は3歳のとき、爆心地より1.2キロの所で被爆しました。その日風邪をひいていたので乳母車で日赤病院に行く途中、暑いので日差しをさけるために日陰を歩いていたので、母も私も瓦が落ちてくる程度ですんだそうです。

現在80歳すぎているらっしゃる高校の恩師は、毎年8月6日を過ぎると暑中見舞いを兼ねた便りを私達に下さいます。よくぞここまで生きられた、必ず書き出しにあります。原爆の日を迎える毎に、あの日と同じ思いがよみがえるのでしょうか。

私には被爆者でありながら、体験を何一つ語ることが出来ないのが残念です。体験した方々の言葉には説得力があります。今まで口を開こうとしなかった人達も、50

年たったから話せる、だんだん年を重ねてゆく中で今しかない、そういう中での一言、生あるうちに一言残して下さるその体験談こそ、二度と再びこういうことがあってはならないという大切な役割をして下さると思います。

入市被爆者として

渡辺 重雄さん

福山市の高射砲隊に配属中、原爆投下の翌日に広島に救護のため入った

私は福山に入隊し、鯛尾にある高射砲隊に配属になりました。原爆の投下された翌日より、広島市の比治山に行き、火傷した沢山の人々の救護をいたしました。水を下さいと云う声が聞こえなくなるともう死んでいる、次々と死んでゆく人、島の方に送りましたがその人達の大半は亡くなってしまふ。何という悲しい事だったのでしょうか。8月の末に福山の隊に帰り、残務整理を9月末まで行いまして、10月2日河口湖畔の我が家に帰りました。

私は40年間、被爆者ではないと思っておりましたので病気その他についても何ら心配をしておりませんでした。それが平成3年春から入院、退院後も通院が続いております。

人と敵対するな、軍事大国となるな、戦争なければ兵器、爆弾不要なり。

※「入市被爆者」 投下後2週間以内に爆心地からおよそ2km以内の入った人は残留放射線に被曝した可能性が高いため、「入市被爆者」としています。

薬のなかったあの時

白沢 いづみさん

助けを求める人の波、やっと歩を進める男女の分からぬ火傷の体を引きづって、次々と公会堂に集まる人、人、人。

それらの人達を床に寝かせ、何か薬をつけねばと思っても、ある者は赤チンのみ、どうにもならない状態に、涙の止めどもなく流れるのをどうすることも出来ませんでした。火傷の軽い人達には、おにぎりをこしらえてきて食べさせてあげるのが、せめてもの慰めでした。

主人の安否は、考える余裕もありませんでした。そしてその人達が一人一人苦しんで死んで行く姿は、一生忘れることは出来ません。

被爆して山梨に帰って間もなく、全身、あちらこちらと腫瘍が出来、寝ることも出来ない状態で大変苦しみました。余り薬もない時代、こんなことで元通りになれるかしらと心配しつつの、長かった回復でしたが今はすっかり良くなりました。数年たってから、肺ガンの疑いで手術をした方が心配が残らないからと、医師から言われましたが、清瀬の療養所の病院に3年間通い続け、もう大丈夫との言葉でやっとほっとし、現在まで生きております。最近では大変元気になり、楽しい日々を送っております。

せっかく出来た援護法なのに私たちの悲願の国家補償がぬけているのは、誠は残念でなりません。是非4文字を入れて下さいます事を願ってやみません。

焼け残った我が家で

匿名

長崎で被爆

8月9日私は下痢のため、本原3丁目の家に一人で寝ておりました。タンスが傾いてビククリして大急ぎで裏口から出て、山の上にある防空壕に向かって走りました。その時、私の家の両隣りの家から火が出ており、私の家も焼けてしまうと思いながら防空壕の中におりました。

しばらくして防空壕を出て我が家の方に歩きましたら、家が焼けないであってうれしくて走って帰りました。弟が大火傷をして帰って来ました。両親も近所の方もみんな火傷をしておられました。私が一人無傷に近い状態でしたので、「ツワブキ」が傷に良いと言われ、あちらの山、こちらの野へと探し回って取ってくるのが私の仕事になりまして毎日が大変でした。焼け残った私の家に近所の人が集まって、一緒に2か月暮らしました。

弟は10日位たった日、火傷のため亡くなりました。家族だけになって家を修理し水入らずで生活しましたが、数年後に父も祖母も亡くなりました。子供の頃でしたが、大家族の生活は大変でした。

あれから五十年、最近では右肩が痛み、手指が痺れるようになり不自由で、困ります。首の軟骨が変形しているので、手術をしても治るとはうけあえないと云われております。

もう二度と恐ろしい戦争はしてほしくないと思っております。

忘れられない光り

木下 勝雄さん

広島で被爆

8月6日、私は県外に行く用があり、乗車券の購入のため、駅まで行って、帰りは線路上を歩きながらB29の爆音が聞こえたので、空を見上げて東から西に行くのを見ながら我が家に着いた。間もなくあの原爆が投下され、稲光のような光が、それが色とりどりに見えました。この光線は今も目の奥に忘れることは出来ません。そのうちに黒い雲が出てあたりが暗くなりました。その後、街の方からこちらに来る人を見れば、顔や手や首のあたりはあの光線のためか火傷して赤身が見えていましたが、私達はどうしてあげることも出来ませんでした。

その日のうちに市内に入って見ましたが、沢山の人が火傷をし、川の中を見れば、水を飲みに行ってもそのまま伏して死んでいる人が一杯で、とても見ておれないので又歩いて我が家に帰りましたが、怖い思いをしました。

肝臓を悪くしたり、胃潰瘍を病んだりして苦しみました。山梨医大で肝硬変と云われ、手術をするようにと云われ、手術をしましたがまだ体の具合がよくなって通院しております。早く元気になりたいと思います。

原子爆弾のために沢山の被爆者が苦しんでいます。再び被爆者をつくらぬよう、被爆者援護法の制定をお願い致します。

特殊爆弾と聞かされて

小林 隆一さん

救護活動のため、翌日に広島市に入った

私は原爆が投下された次の日に広島市に救護活動をするために行きました。そこには、言葉ではいいあらわせない程悲惨な、むごい、まさにこの世の地獄がありました。死体を持ってばぬるぬるとして肉が手に着き、どうしてよいか分からない、そんな人達を集めて穴を掘って焼く等しました。短い日数だったけど、今も忘れることの出来ない光景でした。

上官がこの爆弾は特別の爆弾であるから家に帰っても絶対に被爆者の事や、何をして来た等言っではいけないと聞かされ、一寸心配でしたし、昭和55年頃まで秘密を通しました。

今は心臓が悪く病院通いをしております。

肝臓を悪くしたり、胃潰瘍を病んだりして苦しみました。山梨医大で肝硬変と云われ、手術をするようにと云われ、手術をしましたがまだ体の具合がよくなって通院しております。早く元気になりたいと思います。

原子爆弾のために沢山の被爆者が苦しんでいます。再び被爆者をつくらぬよう、被爆者援護法の制定をお願い致します。

長崎で被爆して

中川 和子さん

長崎で被爆

閃光の後は一瞬不気味な静寂、そしてその後は地獄絵以上の光景が展開され、残酷、悲惨等、言葉では言い現わすことの出来ない惨事を目にしてただ茫然自失……。猛火、傷ついた人々の血の流れ、うめき、そして死、人間が人間に対して行った、この世の中での最高の残虐行為が原爆投下であると云う事を、経験した人も、していない人も永遠に知っておくべきだ、伝えておくべきだと思う。

被爆後は下痢ぎみで、骨が弱いと、20才台から病院に行くと言われていた。

日本政府が、被爆者に対していろんな事を熟議して頂きたい。今まではこの問題についてあまりにもオザナリすぎる。被爆経験者としては、日本政府及び米国政府にも責任のある態度がほしいと思う。日本の広島、長崎に原爆が落とされたと言う事は、日本の戦争責任をゼロにしてもいいような、重大なことだと言うことを世界の人々に知ってもらいたい。被爆者にたいする援護法も又、オザナリだと思う。

直爆をのがれて

石丸 照さん

長崎で被爆

私の主人は三菱兵器に勤めておりましたのですが、原爆の時は大阪に出張しておりました。大阪で空襲にあって、着の身着のまま帰って来る途中で電車は止まったそうです。その日は長崎に原爆が落ちた日で「きぎつ」という所から歩いて来たそうです。そういうふうに話しておりました。それからは勤めは出来なくて身体は悪くなるし、本当に苦勞致しました。今でも二男が昭和 21 年に生まれたのですが、顔とか、身体に色々とデキモノが出るそうです。

それでお母さんを片淵 2 丁目においていましたので、お母さんの所に帰って参りました。私の家は浦上の山里町でしたので、みんな焼いてしまいました。その時は私も、主人のお父さんが 6 月 19 日に死にましたので、お墓参りに行こうと思ってお母さんの所に寄って居りましたら、ものすごい音でした。それが原爆でした。とてもすごいものでした。お陰様で二人の子供と共に、命だけは助けて戴きました。本当にありがたいと思っております。その後は苦勞の連続でした。

書きたい事ばかりですけれども、これでやめさせていただきます。

思い出したくないあの日

匿名（女性）

広島で被爆

あの地獄の苦しみ、私の人生を全く狂わせてしまった。あの残酷な体験を全く思い出したくないのです。絵にならない、語る言葉もない、あの悲惨、50年過ぎる今も何かずうっと惨めさだけを引きづって生きてきた様な自分が哀れになるから過去を思い出すことは嫌です。

熱線に死したる父は骨も無く

いま広島の何処に眠る

偶然か、当時としては年齢の割に子宮癌に早くから侵され、やっとの思いで死から逃れたと思うと、二男の最後の病気、看病のかいも無く、10年もの間、親子で苦しみ続けたのに結果的には11歳で天国に行ってしまった。最近しきりにその子の事を思い出しては、今頃生きていてくれればと切実に思っています。

平和を奪い、平和は有り難いと思います。現代の若い人は本当に幸せと思います。反面、平和に馴れて幸せを幸せと感ぜないようになっている現代の様な気がして、それが恐いです。

二度と原爆投下があってはなりません。地球上から核絶滅を叫び続けるべきと思います。

日時も解らぬ看護

匿名（男性）

長崎で、衛生兵として大村海軍病院に配属中被爆

私は衛生兵で大村海軍病院に配属中、昭和 20 年 8 月 9 日を迎えました。原爆が投下されたのは午前 11 時頃でした。午後 2 時頃から負傷者収容の準備に走り回って居りました。午後 8 時頃トラックと消防車で負傷者が運ばれてきました。病室に運ぶため動けない者は担架で、少しでも動ける者は背中におぶって運び、全部終わったのが 11 時頃でした。ふと気が付くと、服は血と汗にまみれ、人間の死臭と何かの焦げた匂いで食事も喉を通らない様でした。私たち新兵は着替える服もなく、不眠不休で病室を駆けずり回り、彼方で兵隊さん、こちらで兵隊さん、そこでは子供が弱々しい声でオカアチャンと親を呼んでいる。そばに行くと、お母さんは明日になったら来るからね、それまで兵隊さんがついているから心配ないよ、元気を出して、と言うだけで何もしてやれない。朝になったら冷たくなっていた。又、水が飲みたいというので、盃一杯ぐらい飲ませると、コップ一杯ぐらい吐き出し、何もしてやる事が出来ない。その後も、14、15 歳の少年が、40 度近くの熱で、うわ言に先生、先生、ハイ、ハイと勉強している様子に何かジーンとくるものがあった。私は 20 歳の新兵、全身火傷の 20 歳ぐらいの女性が兵隊さんオシッコというので、ちょっと待って、看護婦さんと呼んで来るからねと、日赤の看護婦さんをお願いしたら、貴方は衛生兵でしょう、それ位の事自分でやりなさいとのこと。仕方なく習った通りに何とか出来た、と思ったら火傷がしみるのかヒイヒイと悲鳴をあげる、起こすことも動かすことも出来ないの、オロオロするばかり。私たちは今、何月の何日か、何時何分かも解らないような激務の中で終戦、そして復員の時を迎えた九月の末、各病室を回り患者さんの皆さんに、元気を出して、早く良くなるようにと、お別れの挨拶をして回りました。皆さんに帰らないで看病してくれと、泣かれお互いに涙で別れ、なんとか我が家に帰り着きました。

老人から赤ん坊、草や木、動植物すべての物を、一瞬にして灰にしてしまう原水爆「核」これは地球上にあってはならない、又必要のない物と思います。原子力発電、電気は風力、波力、水力、地熱、太陽熱、光、又、宇宙や月で発電して、地球に送れるようになると思います。「核」の無くなることを念じながら終わります。

水槽の水を求めて

坂本 虎雄さん

広島、司令部で任務中

あの日は晴天で雲一つない暑くなりそうな朝でした。もう 50 年も前のことで時間の記憶も薄いですが、7時10分頃、空襲警報が発令された。間もなく解除になり、防空壕に入った人も出て勤め先にと急いだ。

その時 8 時 15 分頃に突然、ピカッと閃光が走り、ドカンと大音響と、そして晴天どこへやら、暗闇となり、何が何だか分からなかったが、一番に目に入ったのはきのご雲でした。戦友と市内を歩いたが、どこを見ても火傷の死の山、特に目に入ったのは防火用水の水槽の中に首を突っ込んでいた、どんなに水がほしかっただろう、その向こうには家に足を挟まれ、身体だけ残って死んでいる人、道路には馬が腹をふくらませて死んでいる。

司令部に帰ってみると、火傷をした多くの人々がおり、全身火傷をした人達に葉もなく、軍医も衛生兵もほどこすすべもなく、ただ寝かせて凱旋館に並べておくだけで水を求めながら死んで行った。苦しさで隣の死人に乗って死んでいる人もいた、目、口、耳からウジ虫が出ている人、生きている人は島に運んだが、おおかたは死んだようだ。日がたつにつれ、市内は八工と蚊で野宿の市民は眠れないので蚊帳を欲しがった。

焼け野原になった町を親、兄弟をみつけて歩く人々も、見当もつかず大変なようでした。

もう戦争はしないこと、被爆者全員に被爆者年金を支給する事を願っております。

ケロイドを残して

内藤 昭治さん

広島の暁部隊で幹部候補生として任務中、当時 17 歳

昭和 20 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分、広島市への新型爆弾（原子爆弾）が投下されたその時、暁第 16710 部隊に陸軍特別幹部候補生として入隊、当時 17 才。投下の時は朝礼の最中で、上空約 580 メートルの所で爆発した原子爆弾により約 5,000 名の隊員中 3,000 名程が爆死、私は隣の戦友 3 名と共に兵舎前の防空壕に爆風にて飛ばされ、壕の中に何時間居たのかも判明しないが、近くの比治山公園に収容され、応急手当を受け、宇品港より瀬戸内海の似島陸軍検疫所へ収容となり、8 月下旬広島陸軍病院に転院治療を受ける。

この間、何度となくケロイド部分よりうじ虫がわき、終戦の報は生死をさまよっている時だったため、8 月下旬になって知りました。終戦になり病院の手当は不十分になり、又食事にも病人には食べられないようなものとなった為、病院の許可を取り看護婦さんに付き添われて 10 月 13 日退院し、自宅へ帰郷しましたその時、父は寢床にあり意識不明のまま、10 月 19 日に 51 才の若さで他界し、弟と二人きりになりました。昭和 20 年 12 月ケロイド部分が化膿し、国立甲府病院に入院、原爆患者なので 2 か月入院、退院後も約一年間通院をいたしました。

約 10 年間は冬期は左半身が氷のように冷えて大変でした。今でもケロイドが左半身と右足に残っております。

家庭の事情により 19 才の昭和 22 年 3 月に結婚、生まれる子供の事が大変心配でしたが、お陰様で元気に生まれて育ちまして、4 人の男の子は結婚し、孫 5 人にめぐまれ、現在は長男夫婦と孫 2 人の 6 人家族で平和な家庭生活を送っています。が、年々疲れやすくなり弱ってしまふ。

今から 50 年前の広島を思います時、被爆者として全世界より核兵器の絶滅を願うものである。被爆者は私達だけで十分です。絶対に使用してはならないと絶叫したいと思う。全世界の平和を心より願うものである。

あの時の…

雨宮 広之さん

広島

あの時の情景は脳裏に深く刻み込まれた、生涯忘れることはない。

昭和20年8月6日10時頃、爆風で倒壊した兵舎から救出されて、練兵場の片隅にいた。

その時子どもの泣き声があるので、ふと見ると、顔全面と胸まで熱線に焼かれた母親が、苦しさに喘ぎながら、右によろけ、左によろけ、側溝に落ちては這い上がり、二、三歩歩いては、又落ちる。そのあとから5,6才であろうと思われる子が泥にまみれながら「お母さん、お母さん」と泣きながらついて行く。親は自分の火傷で子を見る余裕はない。私も右大腿部骨折で動けない。

親子は苦しみながら、泣きながら、だんだん遠くへ去っていく。

自衛の為の戦争か、侵略の為の戦争か、はたまた両方兼ね備えた戦争か何かは私にはわからないけれど、戦争の一番の被害者は一般大衆である。戦争は二度とあってはならない。

原爆はいらない

匿名

広島の暁部隊で通信教育兵として任務中

私は徳山に入隊して、原爆投下の1か月前に広島市比治山の暁 16710 部隊に通信教育兵として送られ、そこで8月6日朝、兵舎のなかで教育を受けていた時、「ピカッ」と光ったのと同時に兵舎の下敷きになり、助け出された時には、頭と尻に切傷、両腕と足に打撲を受けており、大量のホコリを吸って喉がカラカラでした。比治山の病院に行く途中、丸裸で背中がむけ、ボロのように引きずってる人、血だらけの子供を抱いて泣きさけびながら歩いている人、病院は重症の人で一杯でした。

水をくれと叫びながら次々と死んでゆく姿はまさにこの世の地獄の様で今も忘れる事が出来ません。

山梨に帰りまして2年間位は身体がだるく、身のおきどころもない様な日が続き、心配でした。会社に入社後も白血球が1,800位になり、これで終わりかと思いましたが、なんとか勤め終えることが出来ましたが、現在はメニエール病に罹り、耳鳴り、めまいに悩まされておる毎日です。

一発の原子爆弾により幾十万の人の命をうばい、強い閃光を受けた人は全員火傷をするという、無差別に人命を奪う恐ろしい核兵器は全世界から廃絶することを願っています。

何も知らなかった私

匿名（男性）

長崎、当時1歳

原爆が長崎に投下された時、私は1才3か月で何も知りません。ただ、小さい時は、風邪をよくひいて肺炎になったりして心配したと母から聞きました。4才の時、長崎を離れてから風邪をひくこともなく元気に小学校に通いました。山梨に来ましてからも病気もせず勤務でき、よろこんでおります。

原子爆弾が沢山の人を焼き、後からも病気で苦しんだ、このような悪魔の兵器はいらないと思います。核兵器のない平和を願って止みません。

幼児期に被爆した私

遠山 睦子さん

広島で、当時3歳 爆心地から4km

当時3才でしたので、私は殆ど覚えていません。後で祖母がよく「この子は死にそこなつたので長生きするよ」と言って話してくれていました。

8時15分少し前に起き出した私は、一人で離れで寝ていた部屋から、表の玄関の所で、ジャガイモを取り込んでいた母と祖母を、窓から顔を出して見ていた時に原爆が落ちたそうです。母はうちの本堂に原爆が落ちたのかと思う程、大きな音だったと言っていました。

私の立っていた部屋の天井は落ちたそうですが、窓辺に張り付いていたので外傷一つ受けませんでした。それまで寝ていた離れは部屋中に窓ガラスが飛び散って、寝ていた布団にもガラスが沢山ささっていたので、もう少し遅くまでいると大変だったけど私は怪我一つしませんでした。学徒動員で出ていた一番上の兄は直爆で大やけどをし、眼が見えなくなり、それでも線路づたいに3つ向こうの町まで来た時、うちの門徒さんの馬車屋さんが見つけて下さり、家まで帰れて母に看てもらいながら7日の朝亡くなったそうです。

爆心地から4キロメートル離れていて、家の中にいた事もあったのか、今までは耳鼻科とかで長い通院はしましたが、大きな病気はしないで、お陰様でこの年まで生きさせて頂く事が出来ました。

ただ、精神面で、2,3才で空襲の度に山まで逃げていたのですが、母は出征した父の代わりに寺の法務に行きますので、私は警報が鳴ると、黙って祖母の背中に行ったそうです。後から叔母に聞いたのですが、その祖母が大騒ぎをするので小さな私は怯えていただろうと、青年期になってもどうしようもない恐怖心が胸の底に真っ黒にあるのは、そのせいだろうと言われました。いまだに、夜中や朝方目が覚めるとそんな思いです。

戦争になると人に限らず、すべての物が悲惨な目に遭います。戦争になってしまったらどうしようもないことがよく分かりました。一番大切な命が粗末になります。だから戦争にならないように努力することがどんなに大切かを知りました。

それには先の戦争についてしっかりと勉強をして、人間の弱さ、不安定さを教えられて、世の中の動きをしっかりと見ていける目を養っていかなければならないと分かりました。先

の戦争をきちんととらえないと又同じ事を繰り返してしまうでしょう。

この事を私の近くの人から伝えていきたいと思っております。ふたたび被爆者をつくら
ない為に頑張りたいと考えております。

妹を探した日々

中村 百合子さん

広島で

私が被爆したのは広島市郊外でしたが、学徒動員で銀行に通っておりました妹が、7日になっても帰って来ないので、父と二人で妹を探しに爆心地に行きました。まだ家などがどんどん焼けている中を駆け足で探して歩きました。

焼けた電車の吊帯を持ったまま焼け死んでいる人、騎兵隊の沢山の馬が焼け死んでいる。その馬のそばには必ず兵隊さんが一緒に死んでいました。又、金融機関のカウンターには人馬が腐って牛ほどに大きくなり、ゴロゴロころがっておる等すさまじい光景でした。

あちこちの収容所も次々と何日も探して歩きましたが、銀行に着く途中だった為かとうとう骨の一握りさえみつける事は出来ませんでした。

妹を探している時に、死んでいるお母さんのそばで無心に遊んでいる子供を見て可哀想で泣いたことを思い、もしあの子が元気で成人していたらもう 50 才にもなるのだなとつくづく思いました。

昭和 23 年 3 月に家の都合でアメリカ、ロサンゼルス市に行き、4 年間日本を離れての生活でしたが、戦後の苦労もなく過ごしました。最近では体中次ぎつぎと悪くなり困っております。

せっかく出来ました援護法、是非「国家補償」を入れて下さるようお願い致します。

水、水の声が

杉原 武子さん

広島で

あの日、流川町まで行く用があり、支度をして出ようとした時です。一瞬にして家屋の下敷きになり、気を失ってどの位たったか、外で呼んでいる声がして気がついて、何とかして外に出ようと思うのですが、背中、腕に傷を負い、動くことが出来ません。母や姉の声で、裏の家から火が出ている、早く早くという声で気がせき、体を少し動かし天井や、かべ土の中からやっと這い出し、玄関まで出ました。母は頭から血が流れ、顔がペンキを塗ったように、姉は髪の毛が焼けてなくなり、背中一面火傷を負っていました。学徒動員の中学生も6歳の甥も前後して亡くなり、兄も母も姉も幾年かたって亡くなりました。悲惨な苦痛の様子、水、水、水をという声が、今でも耳に残っています。まさにこの世の地獄を見た。生きている自分が夢の中にいるようでした。考えると生きているのが不思議なくらいです。いろいろの病気をしました。高血圧、不整脈、血尿、脳軟化症、腎のうほう等々、足も痛く歩行困難です。

もう二度と悲惨な思いはごめんです。娘達に迷惑をかけないで逝けることを願っている昨今です。

大家の娘さんの健在を祈る

勝村 田尾さん

広島で

私は原爆で火傷をした人の救護や死没者の処置を 8 月 6 日から 10 日間続けました。死没者処置は火葬をしたのですが、全ての方の特徴、着衣等をノートに記載して警備本部に提出しました。10 日から 15 日まで毎日 1 か所で 10 体をまとめて、約 8 か所から 10 か所で火葬にしたので、その総数は 400 名から 500 名位になったと思います。

紙屋町交差点から南へ 100 メートル程の所で、2 階の 1 間を借りて生活して居りましたが、原爆投下の 1 か月程前に大河の住宅営団に移りましたので家内は助かりました。前に居りました紙屋町の藤井様やその付近の方々を随分さがして、藤井様の娘さんだけ生き残って、練兵場の壕に居られるのを見て安心し、カづけてあげた事が昨日のここのように思われます。その後一度広島に行き、慰霊をしましたが、すっかり様子が変わっていて、藤井様の娘さんの消息も判らなくなりました。お元気で居られる事を祈って居ります。

復員後、山梨に住むようになってから身体の調子が悪いのが半年位続きましたが、働かねば生活が出来ないので、家内共どもに懸命に働いてやっと今日に至りました。

終戦後、勝者の一方的裁判で多くの方々が処刑された事が残念に思われます。日本が戦った諸国はすべて日本の周囲の国々と植民地としていた国々です。日本の経済的發展をおそれて経済の包囲を強くし、昭和の初期では日本人は貧乏のどん底にあり、自国だけでは生活が出来なくなって居た事を皆様思い出して下さい。

戦争をしなくて話し合いで生活の道が得られたら戦争にはならなかったのだと私は今でも信じて居ります。戦争に入れば一部には行き過ぎた戦略、或いは行動が派生的に出る事はいなめませんが、戦勝国が戦後に取った政略、戦略は敗戦国といえども許されざるものがあると思います。ただ、終戦後の米国の食糧援助により死をまぬがれた事だけは日本人として有り難い事だったと思います。

奇跡的に生きて

深沢 政治さん

広島で、兵隊として任務中

8月6日私達の班は、当時中島小学校の建物が建物疎開でこわされ、近くの太田川の川辺に置かれている材木を船に積む使役につくよう命令を受けて、私と班長と21名の兵隊は8時すぎに中島公園に着き、兵たちは弁当の整理をしており、私は川の土手の大きな木の下でポケットからタバコを出して一服つけておりました。

その時です。ピカッと光ると同時に爆風が来たので思わず伏せました。しばらく様子を見ていましたが、次の爆弾が落ちて来ては大変と川の方に這って行きました。すると一緒に居た連中がもう川の中にいたので、「みんなは速かったなー」と言うと「いや、自分達は飯蓋の整理をしていたら、爆風で川に投げ込まれたんだ」という事です。

そのうちあたりが真っ暗になり、大粒の雨がポツポツと降り始め、暗い町のあちこちから火の手が見えました。「さあ大変だ」と点呼をとったら1名足りない。土手に上がったら、加藤上等兵の背中に大きな木が落ちており、ウンウンうなっている。戸板に乗せて比治山の部隊まで焼けていない処をよって歩いたが、町のいたる所に死体がころがっていて足のすくむ思いでした。

隊にやっと着いて、空襲の時、非難する洞窟に入ってその日の夕方まで居た。私は隊に着くと、すぐに朝食べた物を全部吐いた。頭が痛くてどうしようもなかった。一緒だった連中も同じ病状で、これでは使役には出られないから様子を見ようと思っておりました。

15日までは比治山に居りましたが、頭の毛が抜け始め心配です。市中の人達もこんな状態になって亡くなっているとのことで早速日赤病院と宇品の野戦病院に10名ずつ入院しました。

毛がドンドン抜け、喉ははれて痛くて何も食べられない。一週間位して戦友が次々と亡くなり、ついに私一人になってしまった。「此处で死んでは悔しい。少しでも故郷に近づいて死にたい」と強く思いながら、いつしか寝てしまいました。喉の手術をし、明日水が飲めたら助かるという夢を見、助かりたい一心から翌朝コップ一杯の水を飲むことが出来、奇跡的に一命をとりとめました。

21 人の中でただ一人今日まで生きられた事に感謝し、亡くなった戦友の事を思います時、もうこんな恐ろしいものが地球上で爆発する事のないように、核兵器の廃絶を心から願っております。

今、訴えたいこと

小田切 恒広さん

核兵器の問題について（広島・長崎の被爆以来、その恐ろしさ、悲惨さ、残酷さを味わい体験して）

地球上の全人類が核兵器を否定し、廃絶に訴え、阻止しなければならない。

それは一体何だろうか、どうしたらいいのだろうか。これは端的に纏めると、我々生きている人間の・・・そして為政者の責任、使命問題ではないだろうか・・・とも思う。今は為政者に（指導者に）核兵器廃絶運動への、その全責任と義務がかかっている。と言っても過言ではない。為政者とは我々の代表である、その代表という機関に強く訴え理解して欲しいことを願っている。

平和という、地球上の人々が、平和に生き、立派に生きて、平和な広い社会生活を送る。その為の人々への、核兵器の廃絶運動は我々に課せられた、大いなる責任と義務である。むしろ、責任、義務以上の超越した問題であると痛感する。

最近テレビ、ラジオ等の、あらゆる情報機関の報道によっても、又はその対談等を聴いても、核兵器廃絶運動に対する阻止と反対の運動の迫力が一歩欠けているように、足りないように思われる。その切実さに欠けているような気がする。

被爆経験者でないと、人類の為に、血を吐くような核兵器廃絶運動の表現力が出せないものだろうか、等を感じている。

核兵器使用の問題は、今更ながら問題ではないが、現在・・・兵器使用の目的に保有している国は、よく熟慮して、平和問題に取り組んでいかなければならない。

一旦使用してしまうと地球上の人類は大悲惨な状態に陥ってしまいます。本当に人類の破滅になってしまう。本当に心してかからなければならない。生々しい問題である。

今、国民、特に児童への指導、教育問題は（小・中・高校生に対する）果たして、どの位、どんな程度に教えられているのだろうか、等々、大きな課題と必須の問題だと思う。

先に、チェルノブイリにおいて、あの大きな事故が起きて、その周辺の人々への、悲惨な事件、その後の「後遺症」の問題、この後遺症位、深刻であり、恐ろしい問題はない。たちまち取り返しのつかない、障害者になってしまう。

我々は、その後遺症を、自分自身に置き換えて、被害者自身の身になって、その胸中になって、深く考えてみなければならない・・・そして叫びたい・・・核兵器使用の反対運動に・・・

あの報道された写真等を現実に見て、恐ろしく強い戦慄を覚える。

健康に恵まれて、今まで、健全な、健康な生活をして来た人々が、「突如」返ることの出来ない障害者になり、生命まで落としてしまう・・・許されない問題である。

この核兵器廃絶運動に、大いなる一層の運動を起こし続けたい。

原爆病を克服して今

匿名

長崎で、爆心地から 1.5 km 以内のところで被爆

8月9日、1.5キロメートル以内で被爆した私は、無我夢中で市内上築後町の寮に辿り着いた。作業現場の窓側にいて亡くなった人、ガラスの破片が頭に突きささりくるしんでいる人等々多くの異様な光景の中で自分の安全だけが精一杯であった。

帰宿の途中、あちこちに転がっている死体、火災の中を逃げまどう人々、自分もその一員であった。投下後の翌日、山から被災者がおりて来る。「水を下さい、水を下さい」と水を求める人は全身大火傷、一昼夜手当もせず、強い日光にさらされ、皮膚は真っ黒くただれ、ダルマさんの様に顔はふくらみ、誰なのか見分けがつかない程でした。手当を受ける所もなく、あのまま途中で亡くなられたのでは・・・地獄を見た思いが致しました。

水をあげると死んでしまうからやってはいけないと誰かが言ったけど、お水を上げなかった事が、今はずっと心にかかり後悔しています。

被災者の傷口にはウジ虫が湧き、耳の中までその虫が入り、奥さんが一つ一つつまみ出していた列車内の出来事等々、平和な時代には想像も及ばない体験を致しました。二度と当時は思い出したくないです。亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。合掌

戦後間もなく生理不順、下血、頭、手足のむくみ、発熱等気力もなく、近在の医院、県立、国立病院等受診するも、病名判らず苦しみました。昭和36年に虫垂炎、43年に卵巣嚢腫摘出、その後も高血圧症、心不全等が続き、平成3年9月、峡南病院小川院長にて甲状腺機能低下症と判断され、手足の冷え、手のふるえもとれた。平成4年の6月末、脳梗塞で倒れ、更に療養のため専門医和歌山県の要外科内科医に入院、その後は投薬を受けながら現在元気に過ごしています。別記健康調査の通り、医師を回り歩きながらポイントを見出せず大事に至った気持ちです。小川院長の言（被爆十年目の頃より甲状腺発病が多い）との事、要院長の言（甲状腺に関しては医学界も今日のようなではなかった。状況の悪い時代で気の毒でしたね）とおっしゃいました。

戦争は再び起こさない。核廃絶を訴える。地球上から抹殺するまで。

只今、この訴えを書いている最中、10月27日午後6時TBSテレビニュースは米国内で

の原爆投下の是非を論じている。自国の犯した罪を正当化しようとする関係団体を腹立たしく感じる。

世界の人々の常識が正しい判断を下し、核廃絶は勿論、戦争のない、地球上のすべての国の平和を願っています。

核兵器の廃絶を

匿名

広島で、朝食中に被曝

8月6日の朝、松岡家のおじ様と主人は朝食をすませ、軍靴の音を後に部隊へ行き、8時15分頃、女中2人と私を含めた女、子供の食事が始まりました時に、大きな松岡家は明かり窓からの一瞬の光と共に、私達の上にくずれてしまいました。

大きな食器戸棚の下で身動きも出来ない私を、血みどろな女中さん2人が鬼のようになって、手で板をはがして、救い出して下さいました。抱き合っ泣いている間もなく、おば様、娘3人、息子1人を掘り出して、回りを見た時、火に囲まれて、1か所しか開いていませんでした。こわれた家の上を歩いて自分達の部屋から、皆の履物と蚊帳を背負って、どことて頼る所もない私達は夢中で励ましあいながら、風上である海辺に向かって逃げ、火から助かり命拾いを致しました。

農家の松の木に蚊帳を張りましたが、たくさんの方が入って来られて、私は寝る事も出来ませんでした。

後でわかったのですが、立派な防空壕の中のものは全滅だったそうです。前の晩、空襲警報でお風呂の中に入れておいた鍋、釜などは新しいままで松岡家から大変感謝されました。

建物のこわれた下敷きになったためか、ずっと腰が痛く、何年かたった頃から変形症となり、痛みで悩まされています。風邪も治ったと思うと、一週間とたたないうちに又風邪を引くというようで、身体はだるく、血圧は低く本当に困りました。2人の子供も血が薄く、輸血にきかないといわれ心配してします。

被爆者にとってアメリカはいつになっても許せないと思います。政府はご機嫌をとっているようで一人で腹を立てています。どうしてあのおそろしい核兵器を早くなくせないのかと思います。核兵器はいりません。

粥米 50 年を生きて

宮沢 誉福さん

広島

戦争は嫌だ、悲惨だという事です。とりわけ原爆被害の場合は深刻だ。ただの一発で広島
の都市が完全に破壊された。おびただしい路上の死骸、頭をけずり取られた子供、ひどい火
傷の人、また人。こんな光景を見た現実。

建物疎開のため、勤労奉仕で働いていた男、女、学生の犠牲を想起する時、兵隊以上の哀
れみを思います。

被爆者は「ガン」に罹る確率が非常に高い事を聞き、心配だったが、私は被爆して以来、
腸を完全にこわし、あちらこちらの病院、医者にかかりましたが駄目で、来る日も来る日も
粥食の連日で微熱もあり、寝たり起きたりの毎日で 74 歳の老齡、全く生きる希望もありま
せん。核兵器は不要です。

子供の為に平和を

坂口 忠男さん

長崎に住む祖父母の安否を気遣い7日目に入市

8月9日長崎市に原爆が投下された。その時、私の家族は福岡県大牟田市にいて、投下後7日目に祖父母の安否を気遣って長崎市に行きましたが、電車は浦上駅のひとつ手前の道尾駅までしか行かなかった。浦上の町は原爆の投下で緑の草木は黒くなっており、家は勿論無かった。市電が何台か黒焦げで止まっていた。

至る所に爆死されたと思われる人の山があった。写真で見る情景とそっくりでした。遠く大学病院の煙突の一本は真っすぐに、残る一本はくの字になって立っていた。祖母と連れだって通り慣れたお宮の鳥居は半分で、一本の柱だけで立っていた。

現代の人々はただ写真で見るだけの人が多いが、現に私が見た情景は何とも言いようのないこの世の地獄を見ているようでした。

父も今、胃ガン、母もまた眼の病気、私ものどがおかしい、いつ原爆による病気が生じるか、いつも不安です。

二度とこのような思いや、原爆による病気の不安を子供や多くの人々が味わう事のないよう、平和で戦争のない日々が続くように、戦争も原爆も二度と無いように、まして原爆の投下という事はあってはならないと思っております。

直爆をまぬがれて

鈴木 力蔵さん

救護活動ために4日後に広島に入った

命令を受け、水中音波実験のため、滋賀県大津市に行っておりましたが、広島市が被爆したとの知らせで、急遽帰隊しました。8月10日午前8時頃、駅舎の無い広島駅に着きました。

市内は文字通り一面の焼け野原で、海岸の江波が見渡せました。早速、道路の開通を図るための倒壊家屋の整理、被爆負傷者を収容するための仮小屋を作り、死体を定められた箇所に運びましたが、死体は殆どが炭化したものから、建物の下敷きになって押し潰されたもの等、とても人間とは思われないものでした。また、負傷者の中には虫の息で、腹にうじ虫が湧いて、ハエがたかっている、残酷なこの世の地獄絵を見て居る様でした。

現在の核爆弾は広島の数10倍の威力があり、一発で日本全土が全滅すると言われております。核兵器を廃絶することを願っております。二度と再び私達の体験した様な事があってはならないと思います。

怖い原爆と癌

藤野 道子さん

長崎で被爆

幼少の為、唯々恐ろしく、怖かったという思い出だけです。

友人たちが、癌等で最近よく亡くなりますが、いつ自分の身にふりかかるかと心配です。

核兵器の廃止を!!

県内のすべての医療機関が指定医療機関であることを望む。

広島の街の地獄

込山 政清さん

広島 宇品派遣部隊で任務 爆心地から約4km

私は宇品派遣部隊でしたので、中心部より4キロメートル離れております。8月6日当日は完全サービスで教練中でしたが、敵機が一機見えたので隊長が休止して、その行方を見ていました。するとパラシュートを落下、何やらぶら下がっていたので、いつものチラシだなと思っていたところ突然閃光があり、頭が熱く、ドーンと大音響、直ぐ防空壕へ、兵舎がこわれた位でしたが、空にきのご雲がもくもくと上がり、何が何だか見当がつかなかった。出勤命令が出て現地へ、途中電車が黒焦げで、勿論車中の人々も黒焦げです。異臭がひどく、行くにしたがって家はほとんどがガレキと化し、鉄筋ビルが残っている位、中心部に近づくと建物の下に死体があっちこっちとあって、生ある人でもうめき苦しんでいて、うっかり腕など引いても皮膚がつるりとはがれる。担架で運搬、これが東実のこと、次の日から救護活動に出動、連隊本部から部隊がきた。その為、死体の収容がめざましく、道路上に並べていったがただ夢中でした。一発の爆弾がこの被害を与えたのにただ唾然としました。10月になって復員命令が出て家に帰ってきました。まず心配だったのは被爆後二ヶ月も現地で活動していた為、身体に門栓はないかでした。それで山梨県立病院の院長先生と母が親しい人だったので、身体検査をすべてしていただきました。結果問題なく正常を認められホッとしました。現在は県立中央病院で診察を受けており、体調が悪く、いろいろ病気はあるのですが、めまいがひどく、急に家が廻ってしまうので困っています。その為に脳外科へも毎月通院し薬を飲んでいる状態です。再び被爆者をつくらぬ「証」としての救護法をお願いします。

治りにくい風邪

大越 シミエさん

長崎の海軍監督官事務所に勤務

8月9日11時、少し早い昼食の準備に出掛けました。食堂の入り口の石段の処で「ピカッ」と溶接の光の様なものを浦上の方向に見ました。その瞬間からしばらくは分からず、気がついた時は暗い所にいた。手首を怪我した程度で助かりました。翌10日には姑、姑の姉、長女（寿美子）私の四人で姑の故郷（西彼杵郡瀬戸町榎の浦）へ米を少し、衣料等を各人が持って疎開しました。浦上方面が通れないので福田村方面から行く事にしました。黒崎村という所で日が暮れ、姑の姉の知人宅に泊めてもらい、11日も早朝に出発、夕方目的地に着きました。12日朝、6時頃に伯母と二人で長崎に向かって歩くことにしました。なるべく上手に歩く事を考えて下駄ばきで歩きました。木陰で汗を拭いたり、野宿をしながら長崎に着き、そんな事をして6回も往復しました。15日昼近く、道の尾近くで、何となく静かすぎるので、「何かおかしいねー」と伯母と語りながら、20～30人位の団体の人に近づきましたら、ラジオがザーブーと雑音しきりでよく解らないのですが、聞いておりました。誰かしら「戦争は終わったとってよ。負けたらしいよ。今のは天皇の声だったんだって」との事。二人で泣きました。

二度と戦争は嫌です。70年は草木も生えないといわれましたが、南瓜の花が咲き、あれよあれよという間もあればこそ、アツという間に実がつき、大きな立派な南瓜が焼け野に原にゴロゴロところがっていました。「南瓜を食べると下痢して死ぬぞ」と誰かが言い出し、何か気になって食べませんでした。昭和34年風邪をひき、咳と高熱に苦しみ、急性腎炎と診断され、即入院で1カ月半も入院をし、無塩食が6カ月間も続けました。疲れても、一寸汗をかいても風邪をひくという具合で大変風邪をひきやすくなり、又なかなか治りにくく早くて2カ月、長いときは1年の半分は「コンコン」の連続です。腎臓が悪くなり、老化が早く、尿が出たいという感覚がなくなるので、冬と風邪が恐ろしい今日この頃です。

世界中のどこでも戦争のない事を願っております。今国会議員の中にも戦争体験のない議員も沢山いるでしょうが、戦争を身を持って体験した議員は戦争による悲しみを二度と国民

が味わうことのないよう政治を行ってもらいたい。戦争は戦う人達でなく、国民は貧しい食事、生活で栄養失調にならないよう努力しながら子供達を守っていかなくてはならない。もう二度と戦争は嫌です。まして核兵器など絶対にいりません。被爆 50 周年になる今も苦しみ続ける被爆者として、世界から核兵器のすべてが廃絶される事を心から願っております。

いつか、かならず

吉本 富喜恵さん

広島 当時 17 歳

昭和 20 年 3 月、私は 5 年生の女学校、広島第一県女を、1 年短縮して 4 年で卒業しました。そして進学しない者はそのまま、それまでの学徒動員が継続されました。当時、すでに私達は四年の初めから陸軍の被服廠に動員されており、学校の教室をそのまま工場として毎日ミシンを踏んでいました。しかし戦況の悪化と共に大空襲を予想してか、学校工場は 20 年 4 月に、安佐郡川内村の役場の一部に移転しており、毎日広島市内から可部線で川内村まで通勤していました。

8 月 6 日当日、被爆投下の時代には、すでに川内村の職場に到着していましたが、母と八丁堀の自宅を失いました。川内村で二、三夜をすごした後、可部町の荷物を疎開してあった部屋に行った記憶があります。そしてそれから連日、母の消息を尋ねて広島市内へ日参しました。ヒッチハイクよろしく通りすがりのトラックへ乗せてもらったり、歩いたりして通ったものです。あちこちの壁などに負傷者を収容してある場所と氏名が書いてあるのを頼りに、探しに探したのですが、どこにお母の名前を見出すことはできませんでした。

自宅の焼け跡にも遺体は見つかりませんでした。そうこうする中に同じ町内の生き残りの方や、疎開していた方々の消息が、焼け跡に立て札として立つ様になったので、その人達を五日市に海田と訪ねた結果、やっと「母と常盤橋まで一緒に逃げたということを入伝に聞いた」という話を、もう瀕死の重病人となっておられた同じ町内の人から聞く事ができました。しかしそこから先の行方は杳として知れず、どこが母の終焉の地であったのか、もう知ることをあきらめていました。ところが昭和 40 年頃であってと思いますが、外地からの引揚者であった伯母が、それでもと求めてたまたま立ち寄った、東警察署の死者の名簿の中に母の名前を発見してくれました。母の最後の地は大須賀町とあったそうです。

私はいつか、8 月 6 日の同時刻にわが家のあった八丁堀から、常盤橋を渡って大須賀まで母が歩いた道を歩こうと思っているのですが、いまだに果たさずにいます。然し、かならず、私自身の足で歩けるうちに、この道を辿るつもりです。

核兵器の廃絶を

杉田 鉄之助さん

昭和 20 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分、まさに無警告、奇襲爆撃であった。天を裂く熾烈な閃光と地軸を揺るがす大爆音によって一瞬にして広島市は地面に叩きつぶされ、猛火に覆われてしまった。全市が阿鼻叫喚の修羅場と化し、その中を生きのびた者は全裸、半裸のどす黒く汚れた血だるまの幽鬼の姿となってバタバタと死んでいった。この惨状はとて筆舌につきるものではない。今回の阪神地域の大震災は死者 5 千人余、広島、長崎の原爆の死者は 20 数万人であって、当時の世情から救済の手は何等差し伸べられず、如何に悲惨であったか想像に絶するものがある。

強烈な爆風により、一瞬にして家の下敷きとなったので、頭、顔、背中に裂傷、また打撲傷を負ったのである。それよりも原爆後遺症的な症状が 6,7 年間続き、その後も何時どんな症状が発生するのか、そのことが頭から離れず心配で過ごした。また、その後子供が生まれたが、遺伝的なものを背負っておらないかと心配が続きました。

核兵器を所有することは、やがては人類の絶滅の危機を裏付けることにもつながるので、核兵器の廃絶を全世界を挙げて取り組んでいくことが必要である。

命令を待ちつつ

匿名

私は呉海兵団に入団、1週間後に武山海兵団にて3か月間教育を受けて呉に帰国。実習部隊に編入されてからは、広島県内は転々と配置換えされまして、広島に原爆が投下された時には南観音町にあった徴用工員の宿舎の警備にあたっていました。軍からは待てども待てども何の命令も来ないので、私は宿舎の警備にのみ専念しておりました。終戦となり軍人たちの帰国を見て、私も妻の待つ茅野駅に向かいました。

核は一日も早くなくす事だと思います。そして平和な国々になる事を願っております。

直爆をまぬがれて

矢島 和雄さん

広島で

8月6日は命令により、姫路の白浜工廠に居り直接被爆を免れました。新型爆弾の投下により広島市は全滅との事、不幸中の幸いでした。間もなく終戦により広島へ帰りました。広島駅はプラットホームを残すのみで一面の焼け野原を行進して江波に帰りました。江波近辺は、一面あたかも大地震後と同様、家屋すべて倒れかかっていました。私達の学校は鉄筋コンクリートの建物でしたので幸いにも倒壊せず残って居りました。まもなく8月24日広島を発って帰甲。身延線の南甲府駅まで来た時、待っていたのは我がふるさと甲府の一面の焼け野原のみでした。

ノーモア、ヒロシマ、ノーモア、戦争を強く強く後世に訴えます。直接被爆ではなかったのにもかかわらず、仲間の一人が二年後に白血病で亡くなりました。心理的には一抹の不安はあったものの何事もなく過ごしてきました。現在は20年来の糖尿病と共存して頑張っています。核兵器の全廃を訴え実現を願っています。

広島市江波の朝

匿名 (男性)

広島

8月6日の朝、空襲警報解除のサイレンにホッとした。

近くの丘からミンミンといつもと変わらぬのどかな蝉の声が聞こえてきました。「またB29の素通りか、そのうちまとめてやられるかな」と江波陸軍病院の病棟の一角でそんな会話が交わされたのも、ほんのつかの間でした。ピカッと昔の写真のフラッシュに使ったマグネシウムのような閃光を見ました。隣のベットに居た上等兵の口ずさんでいる歌も止まり、「なんだ、なんだ」と一言、二言言う間もなく、一瞬のうちに風圧を感じて、とっさに床に伏せながら、わきのベットの上にある毛布を引っかぶった。とたんに体の上に何やらしきりに落ちてくる。しばらくしてやっと静かになったので、そっと毛布の間から恐る恐る顔を出すと、周囲の窓は飛び散り、木造病棟外壁の腰板が飛び散ってしまい、柱だけが残って、野外がまる見えになって居りました。体の上に落ちてきたのは、爆風によるこれらの破片でした。居合わせた人達も、何が何だか訳が分からず暫くボーっと立ち尽くして居りました。なかには窓ガラスの破片でケガをして助けを求めている人も居ました。しばらくすると病院をめがけて、続々と押し寄せて来る人の波が見えました。最初のうちは着の身着のままと言えばよいか、焼けたままボロボロをまとっている人、続いて着ている物は全くない人、更に頭から足まで全く体毛がない上、肌は一皮はいだように黄色くなり、両手をガラッとぶら下げて、あたかも亡霊のような姿で歩いて来る人の群れを見ました。その時はただ呆然と見ていただけでしたが、後日になると、入院患者であっても、何のすべも出来なかったかと、自分がさいなまれています。その時は軍医は看護婦さんが、あわただしく飛び歩いても外傷の処置位しか出来ず、それも軟膏、ヨーチン等もたちまち使い果たして、傷を洗う程度で、ベットもなく、老化にびっしり並べて寝かして置くだけで、その人達は順次死亡したため、屋外の広場に積み上げた。更に他所で死亡した人を荷車に乗せて運んで来たが、苦しみながら異常な形で死亡し、黒焦げになった人達も広場に積み上げて、次々に焼けました。数日後、聞いた話だと、爆心地の人は焼けて跡形もなくなったり、ヘルメットの下にわずかな骨片が残っている人もあったり、火で逃げ場を失った人達は川に飛び込んで死に、どの川も死体で一杯だったとの事。このような光景は、見聞きするだけで全く身の毛もよだつ思いです。戦後五十

年に達しようとする現在でもなるべく思い出したくない事ですが、これでも爆心から 3.5 キロメートルも離れた江南町の出来事で、有りのままを確実に語りつぐ事は難しいが、再び繰り返してはならない事だと思います。現役兵として 18 歳で暁部隊に入隊、一時入院中に被爆しました。多くの被爆者の病状悪化、死亡の報におびえながら、現在病気と闘いながら、平和な未来を願って、思い出したくない過去の一部に触れました。

(元、人間魚雷の卵)

不安な日々

清水 幸平さん

広島で

忘れもしない昭和 20 年 8 月 6 日の朝、船で作業に出発の時、青白い閃光を浴び、その瞬間に宇品港に落ちました。何がおきたのか分からず一時呆然としていました。翌日市内に行き行ってびっくり、家も何もない一面焼け野ヶ原となり、ガレキと死体、防火水槽によりかかってぼーとしている人、電車は焼けて、吊り革を持って黒くこげた人、電車の周りにも黒こげの人が一杯でとても見ておれませんでした。原爆というとあの日の光景が浮かんで来るので思い出したくありません。一寸怪我をしても血が止まらず、胃潰瘍でも癌とむすびつけて考え、それに二男が心臓欠陥で生まれたので、これも被爆の為かと何時も思い、毎日毎日が不安です。

二度とこんな悲惨な事のない、戦争のない平和を願っています。こんな不安な生活は誰にも味合わせたくない、核兵器の廃絶を心から願っております。

火葬場となった運動場

藤野 義男さん

長崎

昭和 20 年 8 月 9 日、一瞬の閃光が浦上地区の多くの人々を地獄の底に落とし入れた。

当時小学生だった私は、この殺人兵器が新聞、ラジオでは新型爆弾と報じられていたのを鮮明に記憶している。水を求めて皮膚のない身体を半分川につけて息絶えた人、座ったままの姿が、地面のコンクリートに焼き付いた人、蟬取りの格好のまま山中で焼け死んだ子供達など、その惨状は筆舌に尽くし難いものであったらしい。直ちに、市内の小中学校の一部に救急診療所が開設され、救護及び被爆者の収容に当てられた。医薬品の不足と、患者数の多さで十分な治療は出来なかったそうだ。それから数日後であったろうか。私の通学している小学校の運動場が臨時の火葬場となり、疎開あとの取り壊された材木を組んで死体の火葬が行われた。荼毘の炎は昼夜の区別なく天を焦がし、悲しみの嗚咽が運動場一杯に何週間も続いたのを覚えている。全身を包帯でぐるぐる巻きにした被爆者が、大八車やリヤカーに乗せられて通院している姿が日に日に少なくなっていくのを見ながら、私の母は「少なくなったのは、あなたの小学校に行ってしまったのよ」と目に涙して教えてくれた。あの小学校の運動場で焼けた炎の中に、今でも被爆者の悲しい声が聞こえるようである。

県内すべての医療機関が一般疾病指定医療機関であることを望んで居ります。

思い出したくない

匿名

8月6日の事は思い出すのも怖い事で、8月6日と聞くだけで頭が痛くなり、食事も取れなくなって体調をこわしますので思い出したくありません。まして話したり、書いたり等出来ません。恐ろしい地獄です。

帰ってから数年後より病院通いとなり、今は家でゴロゴロしている毎日です。

戦争は嫌ですね。もう絶対に人を殺すことのないようにと願っております。特に、原爆、核兵器等はなくなることを願います。

多くの被爆者を看て

渡辺 智さん

広島で

私は比治山の暁 16710 部隊の船舶通信隊の兵隊でした。軍港の呉は毎日の様に爆撃を受けており、広島市も危ないと云うことで通信所を市外の山中に移動する事となり、第 2 次部隊として派遣の命を受け、兵舎の前に整列し出発の直前の出来事でした。それこそ強烈な光と同時に物凄い爆音がしたその瞬間、今まで一緒にいた戦友がどうなったのか分からない程あたり一面は薄暗くなり、目に土ぼこりが入り、手探りで防空壕を探し、夢中で避難し、暫くして気持ちも落ち着きましたので外に出て見ると、将校集会所を除き殆どの兵舎が全半壊していた。街の中心部は一面に火の海と化し、多くの市民が助けを求めて比治山に集まりましたが、その姿はひどい火傷で、男女の別も分かちがたい程でふためと見られない有様でした。その後、私は日赤病院の患者さんの看護に廻されました。終戦後の 9 月 20 日頃まで日赤に居り、その時の事は思い出すのも嫌な日々でした。私は移動のため完全武装をしていた為に、かすり傷程度で、首に軽い火傷を負いましたが帰宅し数カ月で治りました。昭和 58 年夏に肝炎のため 1 カ月半入院しました。最近になって又悪くなり通院、加療中です。

あのような恐ろしい爆弾は二度と使用することのないようにと願っております。

二世にも手帳を

周防 ヨシ子さん

長崎

長崎で被爆した市民です。話すときりがないので余り話したくない。

横浜市在住の二世には被爆者と同じ「被爆者健康手帳」が交付されております。なぜ同じ親から生まれた子供が二様に分別されるのか疑問をもっております。

目の前で倒れた子供たち

桑原 淳さん

長崎

私は16歳と10カ月の海軍少年兵で、魚雷艇の通信手でした。部隊は天草牛草にあり、本土決戦に備えておりました。私達八名は本体である長崎県川棚基地から30トンの貨物船で深牛に向かう途中で8月2日夜半、エンジンが故障しました。三菱造船所に依頼するも修理出来ず、8月4日頃旭町の鉄工所で修理中でした。8月9日の朝、旭日町の船着場では近所の子供等五、六人が水遊びをしていた。警報のサイレンが鳴ったようでしたが、毎日の事とて気にもせず洗濯しようと思って歩き出した。その時、強烈な閃光・・・続いてものすごい爆風で私はまりの様にころがりました。その上に土壁とガラスの破片で身体の上に落ちて来ました。顔、手、腰等はガラスの破片で出血しました。やっと道路に出て見ますと、空は暗く、風は竜巻の如くトタンやゴミが舞い上がり飛び交っておりました。近くで水遊びしていた子供等が「兵隊さん熱いよ」「熱いよ」「助けて、助けて」と云いながら熱線でむけた皮引きづりながら走って来てバタバタと私の前で倒れていったのに、何もしてやれなかった悔しさ、悲しさ！

出血の為山の上の救護所で止血処置をしてもらい、高台の防空壕から燃え続ける長崎市内、そこでは先程の子供達と同じ姿の人々で一杯。正にこの世の地獄としか云い様のない有様でした。翌日、長崎三菱ドック救護所に運ばれた。黒焦げや、全身水泡の重体滞負傷者の驚く程の数で、死を待つばかりと思われる人が次々とかつぎこまれて来ます。手の甲を3針ばかり縫ってもらいましたが、恥ずかしい様でした。川棚から11日に代替船が迎えに来て呉天草牛草に帰り着く事が出来ました。

疲れやすい、風邪を引きやすい、病気しやすいのは原爆被爆のためであると、すべて悪い方に考えてしまい、神経過敏になり、不調な時には不安でたまらない。いろいろ考えると、核兵器はいらない。「廃絶しかない」。

援護法には不戦の証しとして「国家補償」の明記を要求します。

子孫が心配

匿名

被爆その朝は、前夜から午前3時頃まで、呉軍港が艦載機の襲撃を受けたので、午前中就寝命令があり、朝食をすませ、床についた直後「B 29 だ」の声に目がさめましたが、屋根の土煙のため窓が見えません。やっと営庭にでると、前方の兵舎の屋根が波型に破損、瓦が落下中、片や通信教室はマッチ箱を踏みつけたようにペシャンコでした。自分も屋根からの瓦で頭部と腕より出血でした。この時から、午後1時頃小学校が野戦病院となり、乾パンが支給されるまでの5時間。生涯思い出したくない事実の連続でした。「兵隊さん、水」と言う言葉が最後の人。田の水を飲もうとして、田に頭を入れ死んでいる人達の多いこと。また負傷者は病院に行くから集合に、一人として集まらないのに、敵が上陸したので、戦うのだから集合の言葉には多くの者が集まり、病院行きとなった。後刻考えれば負傷者には理解し難い行動でした。私もその中の一人でした。

私は感じました。人間は予想を越えた変化、特殊環境に合うと大半の人は、その人の体験を主体に判断と行動をすることです。これからは予想を越えた変化、環境をつくらなため核兵器の絶無を念願するものです。現在私は子供達に被爆者であることは口にしますが、当時広島で流言された、草木は3年間芽が出ない。被爆者には子供はでない等々については話題としません。二世検診等を見れば何らかの学説はあるものと予想されますが、これらについては口にしないよう、生涯続けるものと思います。

これからが「私」のたたかい

広沢 猛さん

広島

昭和 19 年 9 月山口県西郡第八部隊に船舶兵として入隊、20 年 1 月広島、暁第 6167 部隊に配属され被爆しました。8 月 6 日その日は雲一つないよい天気でした。

私は公用のため広島駅まで電車で行き、舟入町に向かって歩いているとき、B 2 9、一機が上空を飛んでるのを見た瞬間、パツともものすごい閃光が目の前を走りましたので、その場に伏せました。その後のことは何もわかりませんでした。気がついた時は建物は倒れ、下敷きになって助けを求める人、声も出さずに、ただうなっている人、やっと部隊に着いた時は、町中真っ赤な火の手があがり、煙で何が何やらわからない状態でした。市中は生き地獄の様相でした。飛行機一機で多数の市民をこんなに悲しい状態にした、原子爆弾の恐ろしさを一生忘れることはできません。

昭和 20 年 9 月復員後、体に赤いブツブツと疲労、発熱等々苦勞している現在です。

幼児の体験、背負う苦痛

佐野 眞穂子さん

長崎

長崎の原爆投下の時、私は生まれて2ヶ月でした。被爆の時を母は次のように話してくれました。「ピカッ」と光がして爆風が通り、屋根瓦がバラバラと落ち、土煙で暗くなったので、母は私を自分の身体の下に置き、かぶさって、くれたそうです。やっと見えるようになり私をなめてくれたそうです。このことを母から聞かされたのですが、私はその時に身体感覚として、目が開かない、息苦しさ、いやな気持ちがあったように覚えているのです。生後2ヶ月の幼児がと思うかもしれませんが、私は一生忘れることのできない実体験です。

私は20歳頃腹痛がありましたが、28歳で結婚、2回流産しましたが3人目が生まれ5年後手術を行いました。それからは腰痛、疲労、目の充血、視力低下の現在です。生涯苦痛を背負わされた私から、核兵器廃絶を訴えます。

国連で核兵器廃絶の先頭に

深沢 芳造さん

広島

私は広島で軍人として 10 日間原爆で火傷した人達の救援と死体の処理活動をしました。海岸及び空き地等をさがして穴を掘り、死体を集めて火葬にいたしました。まさにこの世の生き地獄でした。私は爆心地より 4.5 キロの所で、原爆投下時には兵舎の中にいたので、強い光も見ず、兵舎もつぶれなかったので助かりました。しかし 10 日間の死体の処理等で受けた放射能の脅威とその障害作用を思う時、一抹の不安はあるものの現在は丈夫です。

被爆国日本が国連を通じて、先頭に立って地球上から核兵器を廃絶されるよう強く希望します。

小学生よ安らかに

匿名

被爆 50 年の歳月になりますが、被爆の日は今も脳裏に焼きつき忘れることはできません。一発の原子爆弾で一瞬のうちに人命と財産を壊滅した事、また光の直射を受けた人は、全員「やけど」、見る見るうちに火ぶくれになり、顔全面に「やけど」の人は、その日の午後 6 時頃には目が見えなくなり、地面を「はって」兵隊さん助けて下さいと、必死で助けを求めています。私が介抱した子供は小学校 4 年か 5 年生ぐらいの男の子でした。全身黒焦げの状態でした。何千人の「やけど」の治療で手がまわらないため応急処置として、食用油を全身に塗りましたが、一時的の慰めにすぎません。早速夢中で、その子を抱え、臨時仮設の病院に運びました。残念ながらその子供も、顔全面「やけど」で目が見えなくなって懸命の救護の甲斐もなく明朝には亡くなりました。

この残酷な惨劇を二度と繰り返さないためにも、地球上から核兵器が全廃されることを願っています。現在私は年齢相当の体調で生活をしておりますが、被爆者は白血病にかかりやすいと聞いていますが、心配しています。

父母に感謝

匿名（女性）当時3歳

私は原爆が投下された時、3歳と6カ月でしたのでよくおぼえておりませんが、一面火の海となり沢山の人が亡くなったと聞いて、きっと父と母が私と弟を連れて逃げて下さったのだと感謝しております。特に小さい時は病気がちで困ったようですが、6歳のとき長崎を出まして以来元気になりました。こちらに来てからも病む事もなく生活が出来、結婚も出来て幸せと思っております。ただ一発の爆弾が長崎の街を焼け野原にしたのかと思いますと、もう核兵器はいらない！世界中からこわい兵器のなくなることを願っております。

水を呑んで死んだ人

新藤 英一さん

水、水と火傷の身体で這い廻って、足にすがりつかれ、防火用水の青い水を水筒のふたに入れて吞ませてやると、ぐったりして死んでいった。何人もの人々の顔が今でも忘れる事が出来ない。電車のつり革に真っ黒になってつり下がっていた死体の話を伝え、残しておかなくてはならない。ムクムクと大きくふくれ上がったキノコ雲、あの日の事は未代まで忘れてはいけない。二度とあの様な事があってはならない。私は今パーキンソンという病気になり、一日数回も倒れて歩くにも困難。話もうまく出来ない日々です。

三年の命と云われ

一瀬 保さん

広島

8月6日より死体処理を毎日行っており、身元確認を徹底して行う様に指示を受けましたが、ひどい所では全裸の状態、不能でしたが、皮革製品に氏名を刻字してあった場合は製品が萎縮はしたものの、はっきりわかりました。

復員する時に軍医さんから3か年の命ですと云われた事が頭から離れずにいると共に、出生する子供にも影響すると云われて本当に心配でした。被爆により人生を完全に狂わされてしまいました。現在でも心配になるのは白血球の減少です。被爆者の健康管理について、国家補償制度の充実と実現をお願いします。

運よく生きて

匿名（男性）

広島 鉄道隊員として任務中

私は昭和 20 年 7 月に鉄道隊員として召集。広島市横川町に居り、楠小学校で補充兵の訓練を毎日行っておりましたが、8 月 6 日山の中の学校に移動する為、後片付けで残る兵と移動する兵とに分かれ、私は移動する兵と一緒に歩いていたその時、「ピカッ」とマグネシウムをたいた時の様な光と続いて「ドカン」と云う地響きで地に伏しました。その時、顔や腕に軽い火傷を受けた。学校に残っていた兵は校舎の下敷きで死んだ者、ガラスの破片がささって血だらけの者等で、私も残っていたらと思うとゾッとする思いでした。

あの時の事を思うとあんな恐ろしい兵器はいらないと思います。二度とこの様な恐ろしい事をおこさない様心から願っております。

（この文を書いて一か月後の 3 月 16 日お亡くなりになりました。ご冥福をお祈り申し上げます）

一人で悩んだ 30 年

匿名

広島 兵隊として任務中

一発の原爆により広島市が全滅する被害を受けて、この様な大量一時に被害を及ぼす兵器は、人類にとって絶滅の兵器であり、又 50 年以上も放射能障害の後遺症が続くことと、あの日の被爆者の悲惨な状況は筆に表せない状況であることを、二度と繰り返さない様にいたいと考えます。

広島より復員後、数年にわたり、胃痛が続いて苦しんだ。その後、新聞、ラジオ等の情報により、被爆者は放射能の後遺症として異常なことが数々知らされ、人に話も出来ず、一人心を痛めました。だから子供達への影響も考えられましたので、戦友より被爆者手帳の交付申請を進められたが、その時期は申請しなかった。その後年齢も増し、家族の状況も変わったので、昭和 51 年になって被爆者手帳の交付を受けた。現在高血圧と肺腫症、胆石症といろいろの病気で病院に通っています。

この地球上で原爆が使用されると、人類は絶滅すること必至であり、地球上より原爆をすべて廃絶する事を強く要求する。

母のお陰で今日

山梨県甲府市 中沢 フジエさん

広島 当時 21 歳 勤務先の銀行に向かう途中、広島駅前で被爆 爆心地から約 1 km

広島駅前の電停広場で被爆、左顔、首、手足は火傷で皮膚が垂れ下がり赤身が出ていた。目の前の発車間もない電車の中の人達が骸骨になっていたのが一番印象深く、この電車に乗っていたらと思うと今でもゾッとします。

逃げる途中の練兵場で、朝礼していた兵隊さん達の真っ黒焦げの死体の山、まるで地獄の様だった。無我夢中で火から逃れる事しか考える余裕もなく、矢賀町の広場にたどり着いた。そこで運よく勤務先の友達に会い気を失った。翌朝わが家へ運んで頂いたが、母が我が子とは信じられないほど変わり果てた私の姿に幾度も名前を呼んだり、持ち物を調べて確かめた。それから 10 か月余り、家族、私の苦しみ、一瞬にして死んだ友達をうらやましく思った程でした。8月18日父が原爆症で亡くなった。私は母、姉の必死の看護のお蔭で助かったが、私が歩けるようになった頃、母は看病疲れで倒れて他界しました。昭和 23 年始め妊娠した時、私自身が直爆で左半身大火傷の体、又主人も被爆していましたのでとても悩みました。その当時被爆者には正常な子供は生まれないと噂がありましたので一層不安でした。その上私は、医者から 30 歳位までの命と言われていました事が頭から離れませんでしたので、二度とお産は出来ないと思い、勇気を出して出産しました。幸い正常な子供でしたが、5 歳位までは知能の方を心配しました。でも現在、2 児の父親になり、元気で立派な社会人となり感謝しています。私は医者宣言通り 28 歳位から更年期に入り、その後子供は出来ませんでした。火傷の跡が広範囲なので半袖を着る事が恥ずかしく、又温泉にはみんなと入る事をさげました。

被爆直後亡くなった父（49 歳）は勤務先を休んで勤労奉仕で建物疎開に出ていた為、何処からも保証も無く残念でなりません。母も私の看病疲れで病に倒れ他界し、原爆のため両親を犠牲にした事が悔やまれてなりません。又主人も投下当日から救護活動に加わり、死体処理などに当たり、当時はやむを得ない状況だったのに、何時迄もその時の事が後悔として頭から離れませんでした。亡くなるまで原爆の事を口にする事を恐れ、苦しみました。こうした原爆の恐ろしさ、苦しみは誰にも味合わせたくありません。

世界中に核兵器の廃絶を訴えたいと思います。

核兵器の廃絶を

中田 武男さん

広島

昭和 20 年 8 月 6 日朝 8 時 15 分、広島市に世界で初めて原爆が投下された。私は下宿を出て広陵中学校前の電停で電車を待っていたその時にピカーと光を受けて、とっさに伏せたのですが、手と顔に大きな火傷をしました。いそいで下宿にもどりましたが、下宿はペシャンコにつぶれており、歩いて部隊に行きましたら事務の女の人達はガラスの破片が体のあちこちにささって悲鳴を上げており可哀想でした。

私はその日のうちに「似島」につれて行かれ、顔の火傷から毎日黄色い水がタラタラ流れ出て、拭くのに忙しい始末でしたが、命だけは助かりました。島に来た人達は火傷も重くて、重湯も飲めず、人に流し込んでもらっておりましたが、3 日位すると次々と息を引き取り、穴を掘って埋められ、小さな箱には頭髪だけでした。私も 2 か月たって山梨に帰ることが出来ましたが、顔の半分が真っ赤で外に出る事が出来ませんでした。一瞬にして何 10 万人もの犠牲を出す恐ろしい兵器こそ一番に廃絶し、人類平和のために二度と原爆を作ることを禁じたい。戦後 50 年被爆者も老人になり体力も少しずつ悪くなって来ているので常に病院に行く事を心がけています。

今後再び被爆者となる人をつくらぬよう核兵器をなくし、核戦争をおこさない事を望みます。国家補償の援護法の日も早く実現することを願います。

国家補償の援護法を

相吉 英一さん

広島 爆心地から約 20 km のところで訓練中 救護のため広島へ

私達歩兵第 321 連隊は昭和 20 年 5 月に佐倉 57 部隊に於いて編成、広島に駐留し、広島市より約 20 キロメートル離れた八本松演習場に於いて訓練をしておりましたが、8 月 6 日の午前 8 時 15 分米軍の原爆投下により、直ちに軍命令で連隊全員が強行軍で広島市に入市、死体処理及び救護活動に活躍しました。B 29 の爆撃及び焼夷弾攻撃は幾度か経験しましたが、広島駅に到着したときの光景は全く驚きました。焼けただれた体で男女の区別もつかない姿で這い歩いている姿は全く想像もつきません。地獄の沙汰とはこのことだと思いました。こんなことが再びあってはならないと深く決心しました。

昭和天皇の御前会議で無条件降伏は絶対だと決心なされたことは流石の象徴であると感激の極みでございます。あのまま原爆投下が続いたら幾百万人の国民が犠牲になったか知れません。身震いする思いでございます。今後あのような悲惨な状況を繰り返さないよう「国家補償に基づく」「被爆者援護法を」、そして平和な世界を制定されますよう祈っております。

死体処理班であって素手で死人を取り扱ったので、終戦後は心配でしたが、空気のよい山間の町に住んだお蔭か、年 2 回の健康診断を 1 回も欠かさず受けて、健康管理を行っている為か目下のところ医者薬も入退院もなく 85 歳を迎え元気で頑張っております。

やっと国会を通過しました被爆者援護法は骨抜きのような法律でがっかりして居りますが、一日も早く、核兵器廃絶のためにも 50 周年を迎える年を期に国家補償に基づく被爆者援護法を我々体験者の悲願を叶えていただきたいと思います。

戦争のない事を願って

渡辺 幸永さん

8月12日に広島に入った

四国の愛媛県伊予三島に船舶兵として、7月7日入隊し、約1か月訓練をして、8月12日部隊編成の為、広島市に入市しました。原爆が投下されて6日目でしたが、まだ死体を焼いているのか煙がたっておる所もあり、瓦礫がごろごろしており、ところどころに真っ黒な男か女か分からない死骸もころがっていました。一発の原子爆弾が20万余の人を殺す恐ろしい兵器は不必要です。ほんとうに戦争と原爆はいりません。原爆や戦争は嫌だと思っています。

難病とのたたかい

山本 トヨ子さん

長崎 当時9歳 自宅で

8月9日11時2分、私は9歳で小学校3年生、学校は警戒警報でお休みで家に居りました。ピカ！ドン！と7色の閃光が走り、家がグラッとゆれ、驚いてそばにあった布団を被り、音の静まるのを待ち、外に出ると遥かにきのご雲が夏空に浮いていて、恐ろしい予感がしました。家の中はガラスの破片、水瓶が割れ、雨戸が飛び家も傾きました。15分位経った頃、兄が爆心地、浦上の三菱精機より走って来ました。火傷で皮膚はピラピラですぐに病院へ行きましたが人がいっぱい、小学校が避難所となり、廊下に寝かされ、手当てを受けましたが、毒ガスを吸っていたので母の必至の看護も虚しく、12日目に死亡しました。毎日約30名位だったと思います。苦しい、苦しい、水をくれ、水をくれ！との叫びに私は末期の水とは知りつつ与えていました。

もうあの悲惨な戦争は絶対に許せません。

八月九日十一時二分の黙祷は

被爆長崎への我が鎮魂歌

ピカドンの音の静まりて

目の前に大きく浮かぶきのご雲見し

ピラピラの皮膚を纏いし人々は

浦上川へと水を求めて

浦上川の水を浴びたる人々は

一口飲みては浮かび逝きたり

学校が診療所と化し累々と

焼け爛れし人廊下に横たふ

二十才にて兄も原爆に逝きたりし

母の全力開放も虚しく

水下さい、水下さいとの叫び声に

末期の水と知りつつ飲まず

子や孫に彼の戦争の悲惨さを

告げゆかん我は語り部として

私は昭和 60 年 6 月より 9 月まで入院して、子宮筋腫、乳癌の手術をいました。そして、平成元年 9 月に重症筋無力症と診断される。平成 2 年 12 月に胆嚢摘出、その他脳腫瘍もあります。次々と病み、特に筋無力症という病気は、頭痛に加えて瞼が落ちて真っ暗になってほんとうに困っております。健康管理手当の受給に該当しませんので病名範囲拡大を切にお願いいたします。

死体の山

柴村 栄一さん

広島 兵務中

8月6日暑くよく晴れた朝でした。私は朝食をすませて、兵舎に帰ってきた時に白い光線ピカッと光り、ドカンと大きくゆれました。兵舎には多数の被爆した人がどンドンやって来た。それはひどいものだった。特に女の人は裸同様に皮をぶらさげてとても正視できるものではなかった。

医務室があるといっても油と白い粉を混ぜたものを塗ってあげるだけのもので、とうてい治療と言えるものではなかった。

爆弾が落ちた時には気づかなかったが、足のかかるとに火傷と外傷があった。たいした事もなかったので市内で救護、死体の片付けをしました。死体は持つと皮がツルリとむけてしまつて大変でした。穴を掘って死体を入れて油をかけて焼く、焼いても焼いても死体は減らない。毎日毎日いたる処で死体が焼かれた。

あんなひどいむごい戦争は絶対に嫌です。二度とないことを願います。

被爆 50 年

高橋 健さん

広島

1945（昭和 20）年 8 月 6 日、私は広島で原子爆弾の被爆者となりました。広島市の北東部、牛田町、爆心から 2 キロメートルの地点でした。ガラスの破片で傷つき気を失っていた妹の一人（全部で妹は 3 人でした）を背負って破壊された街を山の麓まで逃げたこと、沢山の人が傷ついたり、火傷を負ったりして倒れていたこと、その中に広島放送局で傷を負い、裸に近い格好の女子挺身隊員の女学生がここまで逃げて来て倒れたのをどこかのおばさんがはげましていた光景、街の方からと後ろの山からと両方から燃えてくる火に脅えながら明かした一夜のこと、真黒に焼けてゴム風船のようにふくれ上がった多数の死体が太田川に浮かび、潮の満ち引きにつれ何度も上がったり下がったりしていたのを真上から照らしていた夏の太陽、多くの被爆者の人たちと同様私もそれらを経験しました。

牛田町は町外れですから私が目撃した犠牲者はそんなに多くはなかったはずですが、両手を前に上げ、まる裸でたれ下がった皮膚がほこりで、まっ黒になったのをブラ下げて、よろめいている人達を見た時、私は子供の頃のお祭りの見世物小屋の地獄絵図の亡者を思い出しました。あの絵は昔の人が未来に起こるこの出来事を予知してそれを絵図にしたのかもしれない。と云う気がふとしましたし、それは今でもよく覚えています。それから 50 年、私は核をめぐって現在の状況に全く満足できません。戦争が終わったとき、このような核兵器が禁止されるべきこと、戦争をふたたび起こしてはならないことは誰にとっても明白のことに思われました。だからこそ戦争放棄をうたった新憲法は圧倒的に多数の国民から強い支持を受けたのです。だから今の世の中がなぜこんな事になってしまったのか理解に苦しむのです。50 年間核兵器保有諸国は核軍拡競争を続け、世界にはあり余る核兵器があふれました。今やソ連は消滅し、国際情勢は全く変化してしまい、どう考えても核兵器を持ち続けなければならない理由は誰にも分からないでしょう。それなのに核兵器はほとんどもとのまま維持されています。日本政府は「世界で最初の被爆国」とお題目を唱えるばかりで、国連では核兵器廃絶決議に常に反対してきました。社会党の村山首相の下で、自衛隊合憲、日米安保堅持が確認されました。

一方クリントン米大統領は「原爆投下は正しかった。謝罪するつもりはない」と言い放っています。被爆者は日本が戦った戦争が日本の侵略ではなかったと主張するつもりもなく、自分達が何の罪もない一方的な犠牲者であると主張するものでもありません。私は日本はアジア諸国を侵略したし、被爆者も日本人の一員として加害者の側面を持っていた事を認めます。しかしだからといってあのような核にやる大量虐殺が許されるはずはありません。また現在のような大量な核兵器の保有は人類の滅亡につながりかねない危険をはらんでいます。クリントン大統領が謝罪したくないのならばしなくても結構です。口で云いたくないのなら、その代わり核兵器廃絶の行動をとってもらいたい。しかしそのような事にならないのは云うまでもないでしょう。

あの日、広島と長崎で亡くなった被爆者、その後 50 年間に次々と死んでいった人達が今の世界の様子を見たならば、何と云うでしょう。きっと「自分達が死んだのは、こんな世の中になるためだったろうか」と云うでしょう。私はそれが残念です。何とかしなければと思います。また生き残っている被爆者の人達も同じように考えているでしょう。しかし被爆者の平均年齢は多分 70 才に近く、毎年本会の会員も次々と亡くなっております。被爆 50 年を期して、私達は「ふたたび被爆者をつくらないために」核兵器ゼロの世界実現の為に更に努力を重ねなければと考えますが、我々に残された時間は余りありません。時間はなくても、私達は亡くなった人達の志をついで努力するしかありません。それが人類の未来によりよいものをもたらす事を信じながら。

山のような死体

内藤 嘉彦さん

広島 兵務中

被爆前夜、呉市内の空襲により、翌朝は午前中就寝の許可がありましたが一度空襲警報があつたので出動体制で寝ていました。8時15分頃窓ガラスが真っ赤に光り、爆風と共に兵舎は全壊し、やっとの思いで脱出しましたら傷ついた兵隊、火傷の市民たちを野戦病院（学校）に担架で運ぶ事になり、何が何だか分からないままに、死者の整理、山の様にある死者を朝から晩まで毎日毎日焼いた。その時のズルリとむける皮に最初は気持ち悪いと思ったがそのうち平気で持って、掘っておいた穴に入れて焼いた。今思えばよくあんなことが出来たなーと思いながら手を眺めております。その間の食事と云えば乾パンに水だけで、下痢が続き生きるのも嫌になってしまいました。もうあんなこわい爆弾はいらないなーと思う。結婚に悩み、子供に心配したものです。

どこの国も核兵器を持たないで、地球上から核兵器の廃絶を願います。

火傷もなく

杉原 健さん

広島で化学実験をしようとしたとき

私は広島市東千田町の広島文理科大学の、鉄筋レンガ作りの3階の部屋でこれから化学の実験をはじめようとした時に被爆し、硝子の破片を顔や体中に受けました。閃光は西向きの建物だったので直接受けなかったため、火傷のケロイド症状はありませんでした。

しかし、被爆当時は原子爆弾の恐さを全然知りませんので、処々方々を歩き回りましたので、そのせいでしょうか、帰りましてから1か月ほど寝込みましたが、その後は何事もなく50年生きることができました。

死者にはなむけを

清水 要四朗さん

広島 兵務中 爆心地から約1km

現役兵で仙台に入隊し、昭和18年10月に広島の子品の兵舎に落ち着き、将校当番兵として、8月6日8時に衛門を出て、御幸橋近くの将校の下宿先に向かう途中で顔に強い光線を受けた。下宿の屋根はそっくり飛んでおり、子品にと向かう人々の群れは裸同様の姿で体中血だらけで身の毛のよだつ思いでした。隊に帰り、タオルで顔を冷やしながら上官の知人を捜しに市内の収容所を捜し廻った。火傷をした人をひっくり返せば皮がつるりとはげて、傷には蛆がわき、顔などとても見分けがつかない。私の顔はひどくはれて兵舎で2,3日休む。床に寝かされた火傷をした人は、床が冷たくて気持ちが良いが長く寝ていると体が痛いので、ころりと寝返りをすると皮がペロリとむけて、板の上に皮だけが残るという状態でほとんどの人は「水をくれ」と口走りながら亡くなった。隊の隅では死者が焼かれ、雨の降る夜は、焼け跡や道路に青白くリンガチョロチョロと燃えて気味の悪い事は一通りではなかった。

顔の火傷も治り、特に異状もなかったが、山梨に帰って間もなく熱が出たり、1年中を通して体のあちらこちらに湿疹が出来、かゆみ止めをやめると狂い死にそうとなり、薬と縁が切れないでいる。健康診断でも「原爆とは関係ない」と云われ困っている。5,6年前から肝臓がはれ始め、下を向いて仕事をすることが出来ず、養蚕や田植えをすれば、入院と退院のくり返しとなり、ついに養蚕を中止しました。五十才という年齢で普通ならまだ十分に働けるのに、こんな体になったのも原爆のせいだとしか考えられない。

あれから30年たつというのに、地方の医療機関では医師の認識が足りないため、一段と取り残されているように思う。

被爆者の声を国は真剣に取り上げて一日も早く、原爆で苦しみながら殺されていった人々への花向けとして援護法の制定を願います。

無題

高橋 ゆき（九十七歳）

何分にも年で、何でもすぐ忘れてしまう始末です。すっかり馬鹿になってしまって、難しいことは分かりませんがよろしく願いいたします。

もし私の娘であったら

杉山 国夫さん

広島 兵務中

私は長い人生の中で忘れようとして忘れられないのがあの子のご雲です・・・

あの日、澄みきった青空に閃光とともに白いきのご雲がむくむくと浮き上がりました。何が何だかわからないうちに夜になり、夜の点呼で軍の命令だと云って広島に向かいました。市内の惨状は言葉では言い表せません。ピカドンの一発だと聞き、とても信じられませんでした。

広島連隊の前に並べられた軍人の死体を見たある記者はお化けの行列と云ったとか云う。どの顔も火傷でまん丸い顔で横たわっていました。

今にして思えばよくあんな惨いことが平気で出来たなと思うのですが、当時の市内は大変の数の死体で私達はその処置を優先的にやったのです。暑いので一日でも一刻でも早い処置が急務だったのです。

その時、女子学生のお母さんが来て、この子は私の娘ですからと云って口紅をぬり、化粧をし、頬ずりをし、じっと抱きしめていました。私はその様子が目に焼きついていて、昨日の事のように鮮明に思い出されるのです。もし私の娘だったらと・・・

昭和 50 年に胃潰瘍で入院、55 年には脳腫瘍の手術をする等病気をしました。最近風邪を引きやすく、引くとなかなか治らないし、疲れがとれなくて困っております。私の長男が 2 歳の時、皮下出血する紫斑病という病気にかかりました。私は被爆と関係があるのかと心配した事がありました。その後元気であるので私の責任でなくて良かったなと思っております。

人間同士が唾み合い、憎しみ合い、そして殺し合う戦争、特にあの悲惨なこの世のものは思えない地獄図を見るような核兵器が二度と使われる事のないよう祈ってペンをおきます。

運命の朝

吉野 静湖さん

広島 主婦

8月6日快晴の朝、何時ものように六時に起きる。主人を送り出し、風呂場で洗濯をしたとき、ピカッと、何かしらと思う間もなく凄い爆音、アッ家のそばに大型爆弾が落ちたのだと思い、慌てて奥の押し入れに飛び込んだ。しばらくして出て見たらガラスは全て粉々になり、桐のタンスにつき刺さっており、天井は瓦はとび、すき間から空が見える。

あまりのひどさに声も出ず、ふと気がつく腕や足から血が流れ、頭には大きなコブがあり、いつ怪我をしたのか分からないが傷だらけでした。空は暗くなり、山肌や蓮田、畑の光線のあたった部分は茶色に焦げ何ともいえぬ光景でした。

その内にこの世の人とも思えないようなぼろぼろの衣服をまとい、皮膚を腰や手の先にぶらさげて、その手を胸の所に上げた血だらけの人達や、死んだ子をかたく抱き水をくれと家の中に入ってきた。

家は宮島線の己斐から2つ目の駅の近くにありました。これらの人々は裸足で裸なので、私は浴衣や下駄を上げておりましたが、すぐ品切れになり薬もなくなってしまいました。

そのうち主人の事が心配になり、いても立ってもおられない気持ちで黒い雨を眺めていましたが、夜になっても帰って来ませんでした。後で聞けば大きな建物の下敷きになり、火が出て逃げられなかったようです。

隣組の人達と遺体を捜しに市内に行ったのですが、その途中には大木や電柱は火を吹き、いたる処に黒焦げの死体や半焼けの死体ごろがっており、川には無数の死体が浮いており、主人もこんなだろうかと思っているうちに気を失ったらしく、気がついた時は暗い家の中に寝かされておりました。枕元には主人の遺骨とメガネと腕時計の入った大きな瓶が置かれておりました。やっぱり駄目だったのか、私も目がさめずに死にたかったとさめざめと泣きました。

数日後熱が出たので私も死ぬかと思いましたのに、生き残ってしまいました。

戦時中は婦人会の支部長として皆さんと一緒に何十回となく宇品で兵隊さんを送り迎えしたり、夜中の1時、2時に来る兵隊さんをお泊めしたりした事でしょう。原爆投下による被

爆者のあの姿等々昨日のようにはっきりと覚えております。子供もなく淋しいけれどお花を習いに来られる若い人たちにかこまれた日々ですが、このまま何事もなく過ごせるだろうか？もうあんな悲惨なことはないだろうなと一抹の不安も持ちながら平和を願っております。

被爆者の手で原爆展を米国で

池崎 伸一郎さん

長崎

私は昭和 20 年 8 月 9 日、長崎市寄合町で被爆、広島爆弾と同じ新爆弾ではないかという噂を聞き、浦上方面は壊滅状態との事で、10 日朝、消息不明の近所の人、友人等を父達と一緒に捜しに浦上方面に行く途中の一带はすべて焼け野河原、死体の山、浦上川には折り重なるように人、人、人が浮かんで死臭ただよい、惨々たるありさまはこの世の地獄絵、数時間後に金歯と背中 of 刺青で近所の人を確認、その場で荼毘（だび）にふす。後日友人等多数の死亡の連絡あり。沈痛。

実際に被爆しその場を見た人でないと真の残酷さは理解出来ないと思います。

幸にも私はその後、原爆による後遺症もなく、健康に恵まれ、心配もなく今日を迎えましたが、あの原爆で無残にも亡くなって行った多くの友人達の叫びが今でも頭から離れない。

アメリカ大統領、クリントン発言によれば、原爆投下で戦争終結を早め、結果的に多くの人命を救ったというのですがその論理が成り立つなら原爆は平和、平和を能動的に創造できる兵器という事になる、平和を望む日本が核武装しても可ということになる。

アメリカの原爆肯定は独善的で抗議したい。きのご雲の下で起こった凄惨な生々しい被爆の実態を知らないアメリカの国民に、広島、長崎の市民、被団協の手による独自の原爆展をアメリカで開催し、その実態を知らせるよう、願ってやみません。

被爆のありのまま

越賀 大流さん

広島 軍総司令部 情報通信班で任務中

太平洋戦争も最早手のほどこしようもない末期を感じたあの日、私は広島の第2軍総司令部の情報通信班に勤務という情報の先端にいた。その日原爆投下のその時、私は厚い壁に囲まれた窓の小さい室内で事務を取らされていた。一瞬ピカッと感じた瞬間、気を失ったらしい。

どの位時間が過ぎたのであろうか？長かったようにも思えるし、ほんの数秒間だったような気もする。柱などの間から抜け出し、ようやく窓から這い出した私の目に入ったのは、完全につぶれてしまった兵舎でした。机の蔭にいたため命だけは助かったが、ひじから指の先まで火傷を負い、背中から横腹にかけてガラスの破片でかなりの傷を受け、出血のため立っているのがやっとという状態であった。

つぶれた兵舎には間もなく火が廻り、下敷きになった者の助けを呼ぶ悲鳴が聞こえていたが、どうすることも出来ず、私も気がつくのが遅かったら彼等と同じように、生きながら焼かれてしまったのかと思うと、助かってよかったと思うと同時に助けてやる事も出来ず、生きて火葬されるなど全く悲惨な光景でした。

その後、練兵場の隅に作られた仮の診療所のテントに收容され、火傷には油のようなものをぬり、背中への傷はアルコールで消毒するだけの手当だけが数日行われました。

広い練兵場には次から次へと死体が運び込まれ、長い壕を掘った中へ薪と死体を投げ込んで焼いた。焼いても焼いても死体は減らなかった。

数日後、山の中の仮病院に移され、電車で可部から3キロメートルばかり奥の大林国民学校に收容され、教室にムシロを敷き、その上に毛布を敷いてゴロゴロで寝かされた。火傷、傷とも今までの手当と変わらない。一緒に寝ころんで話をしていた者が朝は冷たくなっている。頭の毛をさするとボロボロと抜け落ちるような者は幾日もたたぬうちに世を去った。便所など血のまじった赤い便でとても入れなかった。でもそうしておれず、何とか用を足す有様、自分もいつか死んでいった人のようになるのかと不安だった。

9月15日になって帰郷命令が出されたが、火傷も背中への傷も残っていたが、どうにか動け

るので帰ることにしたが、当初の三分の一くらいしか生き残っていなかった。

3,4人で一緒に広島を後に満員電車で、志摩半島にある妻の実家にて半年ほど養生をして山梨に帰りました。

被爆二世について心配もしましたが、何とか元気でいてくれますし、私も84歳の今日まで生きられるとは全く予期しない幸せとっております。高血圧と糖尿病と付き合いながら生きております。

原爆などというものは人間世界にはあってはならない兵器で、原爆を所有している国は即刻に廃棄してほしいと思う。

死の座をうばわれて

米内 幸子さん

広島 広島生まれ

私は広島で生まれ、育った者で、8月6日母と一緒に家の下敷きになって焼殺されるべきでしたのに、甲府空襲で焼け出された姉が下痢と熱で痩せ細った子供をつれて7月30日の夜中に広島に来ました。すぐに疎開をさせればよかったのに、私が掃除にと50キロ離れた山間の田舎に行き、5日早朝より下痢、嘔吐が午後まで続き夜帰る予定が帰れなくなり、みんなの骨を拾う身になったのです。

原爆投下の時間、白い閃光が走り、ガタガタと障子が揺れました。西条あたりに大きな爆弾が投下された位にしか考えておりませんでした。どうも違うらしいと、姪と2人で8日朝、八本松駅までバスで出て、そこから黙々と歩いて広島には4時頃着いた。

駅には屋根もなく、前を見ると小さな己斐の山と左に江波が見え、鉄筋の外郭と幹だけの裸木が見えるだけ、足元を見ると真っ黒な死体が瓦礫の間に見える。どうしたら我が家までゆけるのかと思案するも、勇気を出して歩くより他になしと、江波方面に向かって、死体を踏まないように、ころばないように気を配って進む、

あの美しい川の中に大きくふくらんだ死体がどの川もどの川も、それこそ一杯に浮いていたのです。やっとの思いで我が家の焼け跡にたどり着いたのですが、キレイに焼けて、鍋や釜、そして缶が焼け残ってころがっており、2か所に黒いものがあったので近づいて見ると、背骨の焼け残りなのです。そっと骨を持ち上げると、そこには真っ白なサラサラとした骨があり、他方の背骨の下には白い骨とそばには可愛らしい歯がそのまま白く焼けており胸のつまる思いでした。そのキレイな骨が又とても臭くてむかつくような匂いでした。

6歳と4歳の子供の骨を掘り返し掘り返して捜しましたが、骨は勿論、小銭の焼けたもの一つみつからず、石と砂だけの土で、とてもキレイに焼けておりました。

江波行の電車道は家のすぐそばで、線路の上にムシロを敷いて、沢山の火傷者が白い薬を塗ってあるだけで、きっかりと寝ころばされて、「痛いよ、痛いよ」とかぼそい声が聞こえ、何とも言えぬうめき声、その間に水を下さい。水を、水をの声、そして黒くなる程沢山の蠅がたかっておりました。誰にも看取られず亡くなった人々の姿と声は忘れられません。

市内のいたる所で死体が焼かれており、穴を掘って、市内の死体を大八車に入れてまとめ、ゴミの様に扱われておりました。昼は焼く煙が黒く、夜は赤々と見えて、とても悲しく淋しいものでした。終戦の日まで続いた。

義姉と10才の甥は疎開先から広島に出て、八丁堀あたりで電車の中で被爆、無傷で疎開先に帰宅しましたが、10日ばかりして発熱、脱毛に斑点と原爆病に苦しみ、9月1日死亡し、10才の甥も頭髪はなくなりましたが、元気になり安心しましたが、1才の姪は母乳を口にした為に斑点が体中に出来、目からも血を出しながら母親の後を追って死亡しました。

死体処理の為に広島に来て、10日位で帰隊した兵隊さんがやはり発熱、下痢、脱毛で死亡された。これらは姪の死と同じように残留放射線によるもので、体内に入った放射線は体の中の細胞をこわし、いろいろの病気の症状があらわれますので、自分の体の一寸した異常にも神経をとがらせ、子供の病気、結婚とたえず悩み続けて来ました。今も癌で亡くなる人が一般の人より多いというのも放射線を受けた為なのです。

世界中仲良く

村松 寿さん

広島、長崎に原子爆弾が投下されて 50 年になります。

写真、新聞、テレビ等で 50 年前のことを報道されておりますが、それよりも実際の方が数倍もひどいもので、広島市の資料館に行って気持ちが悪くゆっくり見ておれなかったとよく云われますが、原爆にあった者でないと分からないと申しますように、どんなに真実を伝えようと話してみても、書いても、その何分の一しか伝える事が出来ないのが残念です。

一番おそろしいのが目に見えず、匂いもない放射線です。その為に白血病、ガン等になる人が多いわけなのです。火傷をしなくても、無傷な人が死体処理を 1 週間、10 日と行っただけで原爆病で亡くなっているのです。それが土の中にも物体にもあり、何とか怖い事でしょうか？広島に 70 年は人は住めないと云われたのもここに原因があり、本当に安心して住めるには長い年月を必要とします。次々と実験等されるとそれこそ大変です。

被爆者の結婚に困ったと云うのもその為でしょうが、二世で被爆者と同じような心配はないようです。

いずれにしろ一発のピカドンであれだけの被害を受けたのですから、現在世界に点在している核兵器の事を思うと卒倒しそうです。こんな怖い核兵器を世界中からなくして、世界の人々が仲良くして暮らせるようにしたいものと考えます。

日本が世界で唯一被爆国なのですから、核兵器の廃絶運動の先頭に立って頑張ってもらいたいものです。

振り返る 50 年

山梨県甲府市 内藤 藤三さん

広島 暁部隊で任務

広島・長崎に原爆が投下されて 50 年の節目を迎える時、過去を振り返り思い起こせば一瞬にして 20 数万人の尊い命が奪われ、生き地獄と化しその残虐さは目を覆うばかりでありました。当時は特殊な新型爆弾、どんな爆弾かわからなかった。原爆が投下された時、私は壕の中でした。壕の中まで襲うものすごい爆風、瞬間的烈風の風圧で天井の丸太が落ち、頭と首を直撃され、数分間意識を失いました。

しばらくして意識が回復し、ただ死に物狂いで壕の外へ出てみると驚いたことに広島の街が消えていたのです。まちの全体の建物が破壊され、家らしきもの一つ見当たらず、コンクリートの壁が数カ所に建物らしく見えるのみで、既にあちらこちらに煙が立ちのぼっていました。これだけの広範囲を一瞬に灰燼に化したのです。

耳に入ったのは建物の下敷きになって家族を呼び合う声、泣き叫ぶ声、助けを呼ぶ悲鳴ばかりで、それが方々から聞こえてくる、それから光熱射線で火傷した人、川の中にもうごめいていました。男か女かもわからない焼け死んだ人たち、ガラスの破片が無数に刺さり、血や肉のかたまりが、それは生きた人間の姿ではなく見るも無残で全く悲惨な光景でした。

50 年を静かに振り返ってみると、幸い、私は壕の中にいたため、原爆の光熱射線を受けず命拾いをしましたが、放射能を多量に浴び九月に復員しましたが、高熱病にかかり病床につきました。「これは何の病気だ」治療の方法はわからないまま、40 度からの高熱が数日間続き、当時病名はついにわからず一時は危篤状態となり、その後放射線障害とわかりました。せっかく一命を取り留めたのだから苦労しても生き抜かねばとの思いに支えられて半世紀になります。復員当時大病してからいろんな疾病を併発して、回顧してみると薬漬けでよく生きながらえたと思います。現在も病気と闘っています。被爆した時、首を丸太で直撃されたその後遺症が残り、会社勤めのかたわら通院の日々を過ごしています。

今年是被爆五十年、過去を振り返り、複雑な心境であります。原爆や戦争がいかにもごいものか、生ある今訴えておかなければ、今の時代の子供や若者に残せる最大の遺産は、戦争や原爆の悲惨さを語り伝えることでもあります。広島・長崎は原爆投下の熱放射による火災と

火傷、その後の放射線障害等から力強く立ち上がって 50 年が過ぎました。

終戦の昭和 20 年に生まれた子供たちも 50 才になります。戦争を知らない人々にこれを語り継ぐことと、平和を願いながら戦争の悲惨さ、罪深さを後世に語り伝えて、私達被爆者は身をもって体験した原爆を世論に訴え、これから 21 世紀を生きて行く子供たちに再び原子爆弾などという大量殺人を行う兵器がこの世で使われることのないよう心から願って核兵器廃絶を積極的に伝えていかなければいけないという責務があると思います。